

オープ1000個使っても欲しいのが出なかつたら逆に召喚されて件について

人中の蝮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファイアーエムブレムヒーローズのアプリをやつているとある人物がリアルでファイアーエムブレムの世界で戦いや暮らしていく物語。

後に月光の召喚師と呼ばれる男の物語。

目 次

伝承英雄ガチャで確率が15%まで上がったことある？	1
これしきの包囲、打ち破つてやる（車で）	1
親友の愉快な仲間たち	1
逆境から始まる反撃戦	1
勢いは大切だよね！	1
英雄たちから見た蝮の評価	1
その頃、蝮たちは・・・	1
蝮の策	1
大勝利の後・・・	1
不幸は突然に・・・	1
龍同士の戦い	1
オーブがあるなら召喚したくなるよね？	1
きさらぎ駅の攻防戦	1
きさらぎ駅の退却戦	1
ニニアン救出戦	1
とある記憶・・・	1
とにかくディアドラさんをあの人元に・・・	1

伝承英雄ガチャで確率が15%まで上がつたことある?

当たらねーーーーー、俺はファイアーエムブレムヒーローズのアプリをやりながらそう叫んでいた。どう頑張つても欲しいキャラが当たらなくてイライラが溜まつて叫んでしまつた。

真面目に出なくて叫んでしまっただけどだつて伝承英雄ガチャで確率が15%まで普通、上がる?

しかも2回連続!お陰様でオーブを1000個も使つたよ!なのにキャラは真面目に少ない。まだ70ぐらいしかいないぞ。

仕事場の先輩は欲しいキャラを300位で揃えたのに真面目に不幸になれと心からそう願つたよ、ついでにその先輩はパチンコで数万円勝つて楽しんでいたよ。

畜生め!あの豪運野郎が!本当に落ち込むわ、親友は病気が悪化して意識がなくなつて命には別状はないらしいけどいつ目が覚めるか分からないし。

本気で親友は一人しかいないからやることが無い。そう落ち込んでいる時に俺もなろうみたいな事が起きないかなと考えていた時に急に俺の周りに異変が起きた。

急にアニメで見るような魔法陣が現れてもしかして異世界召喚というやつですかと思いながら俺は期待を膨らませていた。とうとう俺もなろう主人公になる時が来たようだと興奮していた。

しかし、この時になつて俺は重大なことを思い出すのであつた。仕

事場の仲間に迷惑を掛けてしまうことに、不味いよ。

こう見えて時には一人でその場を回していることもあるのに俺が居なくなつたら誰がそれをやるだよ。意外にも仕事が早いと言われているぐらいには仕事をしているだぞ。まあ、見方次第では良いように使われてるとも言えなくもないけど。

どうしよう、でも召喚した人の話を聴いてからでも遅くはないか。だつて務めている会社は正直に言つてブラック企業と周りからは言われているからそこまで・・・ここは使つていらない有給休暇を使つたことにしてよう。

と言うか親友にお別れの挨拶を済ませていないですけどせめてそれをさせて下さい。でも召喚の特典など良くあるからそれで親友を助けてくださいとお願ひすれば良いじやないか。俺って天才ね！

まあ、そんな事で考えは纏まつたのでそのまま俺は流されるままに召喚させるのであつた。そうして俺の目の前にはとても美人な女神様がそこに存在した。

やっぱ、真面目に女神様つて美神だなと思つた。このすばみみたいに神らしくない女神ではなくしっかりと美神と言える存在がいた。

でもせつかく召喚せるのであるから俺はある有名なあのセリフを言う事にした。親友と良くこのアニメは楽しんで観ていたよなと思ひながらできる限り格好良く言つた。

「問います、貴方が俺のマスターですか」

Fateで有名なあのセリフを言わせて頂きました、だつて召喚されたら絶対に言つてみたいとずつと思っていたぐらいだから。それ

にしても俺を召喚して何をして欲しいのかな。

生憎な事に俺は正義感などあんまりない男だから期待はしないで欲しいのだけど、なんせ歴史から好きな知人からは蝮と呼ばれるぐらいには性格は悪い男だ。

そんな男になんの目的で召喚したことかと思つていた時に相手が言葉を話し始めた。聞きたいことを言つてくれるから助かるなと思いつながら聞いた。

「急に召喚をしてしまいまして本当に申し訳ありません。私はツクヨミと言います。どうぞ覚えてくれたら幸いです」

ツクヨミ様——日本で有名な神様ではないですか、そんな女神からの依頼ってなんだと考えていたらこれも向こうから答えてくれた。

「実は貴方にはやつて欲しいことがあるのです。それはとある人物を守つて欲しいのです。とある人物は今はファイアーエムブレムの各地の英雄達に包囲をされて絶体絶命なこの状況をあなたの腕で救つてほしいのです」

いやいや、とある人物を助けてほしいは分かるけど相手が今、やり出しているファイアーエムブレムヒーローズに関する人物たちから守つて欲しいってそれは流石に厳しいと思うのですけど。

俺なんかよりも適任者がいると考えていますと答えようとした時にここでツクヨミ様がとんでもない事を追加情報出してきた。

「その助けてほしいのはアジ・ダハーガと言う最古の龍であり、その正体は貴方の親友でもあります」

本気で親友がアジ・ダハーガなの、やはり親友はなにか違うなとは思っていた。俺の目は正しかったわけだ、そんな事を今は感心していいる場合ではない。

とにかく今は助けに行かないとファイアーエムブレムシリーズを通して確かドラゴンが相手のが多かつた筈だからこれは本当の事だろう。

ここで親友を見殺しするぐらいならば戦つて死んだほうがマシだ。ツクヨミ様、どうか親友の場所に転移させて下さいとお願ひするとツクヨミ様は俺に対し親友を手助けする為に物資も用意してくれた。

それはなんとトヨタ自動車・・・これで敵の包囲を突破して親友を助ければよいのですね、喜んで向かわせてもらいます。

ファイアーエムブレムシリーズが敵、十人来ようが百人来ようが俺が全て倒せば問題なしだ。大乱闘スマッシュブラザーズで出てくるほど有名で強くても倒せば良い。

こちらだつて御先祖は日本の戦闘民族と呼ばれている薩摩隼人の子孫だ。戦つてやるさ、決意を改めて言うとツクヨミ様は転送させるので車に乗つてくださいと言われた。

親友よ、今助けに向かうから待つてくれ。お前の親友であるマムシが向かうからそれまで耐えてくれ。

俺は転移を終えた瞬間、遠くで大勢が包囲しているの光景が見えたので親友はある包囲の中にいるのかと考えた。車のスピードをマックスまで上げて俺は包囲網に向つて突撃をするのだった。

これが後に月光の召喚師と呼ばれる男の始まりと言われることに

なるのであつた。

これしきの包围、打ち破つてやる（車で）

車を走らせた先では完全な包囲網が形成されていた、恐らく親友はあの包囲の中にいる。ならばここは車の力で包囲網を広げてから車に乗せて突破をする。

これしかないなど考えて俺は車で猛スピードで包囲網に突っ込み始めた。かなりの速さで当たれば即死クラスかもしねない。

実際に昔に交通事故で車にはねられて生死を彷徨っていた事もあるから余計に車の威力は理解をしているつもりだ。

例え主人公クラスでも倒せるほどと思つてゐる。まあ、俺の実力ではないけどそこは今は置いといてさあ、大勝負と行きましょうか。

俺は車のクラクションを鳴らしながら大声で叫んだ。

「日ノ本の民、人中の蝮。仁義でアジ・ダハーダにお味方する、い
ギーーーー」

すると車のあまりの速さで包囲が左右に避けて包囲が無くなつた。良しと思ひそのまま走り抜けて包囲網の中に入るとそこには親友と見たこともない女性がいた。

親友の仲間なのかなと思つたので二人を守るように包囲網の中で走り回つた。包囲が車を避ける為に大きく拡がつたのを確認した俺はすぐに親友の元に向つて車を停車させた。

「豊っち、大丈夫か？かなり遅れたが助けに来たぜ。急いで乗つてくれアイツらが来る前に、さあ、早くそこのお嬢さんも」

親友と青髪の美少女を車の中に入れ終えたらすぐに扉を締めて二人にしつかりと捕まつていてと伝えてから急発進させた。迫りくる敵兵を待たしても驚かしてから猛スピードで走り出した。

そんなスピードが出ている車の前に立ち塞がる男が2名ほど現れた。俺は車のクラクションを鳴らしたが避ける様子はなく立ち塞がるから車にはねられても恨むなよと思いで猛スピード出して前に進んだ。

それで二人は避けずに車を切つて壊そうとしていた。無理な事をそもそも無理をやらずとも逃げてくれたら怪我などならずに済んだのにと思いで二人に衝突した。

車のスピードはかなり出っていたので二人は物凄い勢いで吹き飛ばされた。外からアイクーーとか先生ーーとか叫び声が聞こえてきたが誰と思いながらそのまま走り抜けた。

それからだいぶ距離を走つてからスピードを落としてから会話を始めた。

「豊っち、本当に久しぶりだな。もう会えないと思ってこちらは泣きそうだったよ。それとそこのお嬢さんは・・・自己紹介がまだだつたね。俺は吉田雅也、どこにでもいる普通の社会人だ。変わった所は中二病が完治してなくて小説が書くのが好きぐらい」

「ふつふ、面白い人。豊喜さんの言う通りの人ですね、私はリリーナと言います。先程はありがとうございました」

俺は気にしないで親友を助けにきただけだからと言つて親友からどんな状況なのか教えてもらつた。

簡単にまとめるとなれば親友は病氣で意識を失つたと思つたらこの世界に召喚されてそこで共に戦つてほしいと言われたので協力していたけど途中で前世の記憶が蘇つてその前世はアジ・ダハーガで最古の龍で仲間たちの殆どから討伐するべきだと言われて一斉に攻撃された。

しかし、一部の人達からはそんなことはないと言つて助けてくれて共に戦つたが余りにも戦力差があり過ぎて撤退を余儀なくされて親友とリリーナさんは他のみんなを逃がすために殿を引き受けて頑張つていたが追い詰められて絶体絶命と言うときに俺が助けが来たというわけらしい。

はあ、親友を異世界に読んだ挙げ句は殺そうとしているの・・・親友を召喚したやつ絶対にぶっ殺す!!泣いて謝つても許してやるか。じわじわとなぶり殺してやる!

溢れ出しそうな殺意をなんとか抑えて俺たちは親友が先に逃した仲間たちの方に向かつて走り出している。まあ、親友の事だから良い人達なのは理解はしているけど。

そんな事を考えながらもう少し話を続けようと親友に對して話をした。そう言えばさと言つて隣のリリーナとはどんな関係と軽い気持ちで聞いてみると二人とも赤くなっているのを確認した。

あれ?もしかしてもうかなり深い関係だつたりすると思つてもしかして彼女さんと聞くと親友は違うと恥ずかしそうに言つていた。

うん?ならばどんな関係なの、こんな反応を見て絶対に彼女さんと思つていたのにと考えていたら想像の斜め上の答えが返ってきた。

「雅つち・・・実は彼女ではなくて・・・夫婦なんだ。リリーナとは3年前に結婚して妻なんだ」

・・・本気でそれって滅茶苦茶、おめでたいことじゃないですか。祝い金、全然用意していないんですけどやっぱいこんな事を知っていたら口座からお金を下ろしていたのに。

そんな事を必死に考えいたら更に追撃をかけるような言葉を耳にした。

「それに実はこう見えて・・・子供も一人、いるだよ。まあ、リリーナに似て本当にかわいい息子が一人」

ぎやああああああああ、祝い金をなんで持つてこなかつた俺は。知らない間にとんでもなく祝をしないと行けないとあるじやないか。

と言うか滅茶苦茶に会いたい、とても可愛いと言つてている親友の子供に。そう言うと親友は落ち着いたらいつだも良いと言つてくれた。

俺は良しと思つたが、冷静に今はそんなことを言つてている場合ではなかつたよね。仲間たちと合流してからこれから的事を考えないと行けないからね。

もしかしたらこれまで無意味だと思つていた歴史オタクに異世界転生を期待しているんな溜め込んだ知識が活かせるかもしけないと思いながら俺は車を進めるのであつた。

親友の仲間はどんな人たちなのであろうか、そしてかつて夢に見た親友を國の主にさせる夢が叶いそうと心で喜びながら作戦や内政などこれから的事を考えるのだつた。

親友の愉快な仲間たち

車を走らせながら俺は周りの景色を見て改めて異世界に来たのだ
なと思いながら走っていた。するとここでようやく親友の仲間らしい一軍を発見した。

親友に確認してもらつたら間違いなく仲間たちだと言つてきたのでならば安心だなと思つて向かおうとしたら車の上辺りから止まつてくださいと言われた。

上に誰かいるのかと思つて車を止めて見るとそこにはペガサスに乗つている紫色の髪をした美少女がいた。この子も滅茶苦茶可愛いじやんと思っていたら彼女が持つている槍であなたは敵ですかとこちらに向けて聞きてきた。

俺は敵ではありませんと言つて親友とリリーナが後から降りてきた。すると紫色の髪をした美少女が豊喜さんにリリーナさん、大丈夫だつたですねと安心な顔をして話した。

その後に親友が俺の事を説明してくれた、すると紫色の髪をした美少女は頭を下げて謝つてきた。俺は別に仕方が無いことだから気にしないでと返答した。

「あの・・・・申し遅れました・・・私はフロリーナとです。そしてこの子が・・・ペガサスのヒューエイです。覚えて・・・くれると嬉しいです」

少しばかり人見知りなのかな、彼女を見ていると本当に幼なかつた親友を思い出すな。だから何かしらで惹かれ合つたのかなと思つてゐる。

そうして車に再び乗り、少し先の軍勢まで走った。そこでは多くの人が親友の帰りを待っていたようで歓喜の声が上がった。流石だな親友、これだけの人を集める人望があるとは俺では絶対に無理な話だなど見て理解した。

すると親友の仲間の一人がこの男は誰と親友に聞いてきたので俺は先に答えることにした。

「クックつクック、どうか我が名を知りたいか！ならば教えてやろう。我が名は吉田雅也、人類史上最悪最凶と呼ばれている悪党だなり。契約者の命の危機を感じ、遠くの地から召喚させし者なり。さあ、今こそ我と契約者共に天に飛び出そうではないか」

これを聞いた親友の仲間たちは親友を見てもしかして元の世界で頭が可笑しい親友がいると聞いたことがあるのですがそれが彼なのですかと言つてきた。

親友は迷いもなくその通りだと皆に伝えた。おい、そこは少しぐらいは違うと言わないか。確かに頭はおかしいとは思うけどさ、少しぐらいは庇つても良くない。

まあ、俺の自己紹介が終えると明らかに小物臭する男性が現れた。親友は小物みたいなキャラが好きだからなと思つてみると共に馬みたいに一緒にいるのはドラゴンであつた。

余りにも格好良くあるので俺はすぐに目に入った。するとその飼い主であろう人物が声をかけてきた。

「ほう、私を見ているとは流石、豊喜の親友というだけはあるね。この私の威光が分かるのかい（本人の）」

「はい、威光が溢れて見えますよ！明らかに他の者と違いが出ていましたから俺には分かります（ドラゴンガ）」

「なるほど君も私と仲良くなることが出来そうだ、これからよろしく、私の名前はナーシエンだ、覚えておきたまえ」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。ナーシエンさん」

第三者からするとなんか話が噛み合っているようで噛み合っていない気がしてたまらなかつた。でも皆がまあ、ナーシエンだから別に良いかと完結させたのであつた。

次に俺の前に現れたのは和風の服装している弓矢使いの少年であるほどなと思っていると向こうから話してきた。

「お前が豊喜の親友だからと言つてもまだ信じていないからな。一応、名前は名乗るよ。タクミだ、もう言わないからな」

なるほどタクミ君というのね、しつかりと覚えておかないと。それに親友の親友だからと言つて信用しない所はしつかりとしているなと思つた。

信用はこれから作つていくものだしと思つてまずは確か、車の中に食材を沢山積まれてあつたからご飯でも奢つてあげようかなと思い車に戻つて扉を開けようとしたら今度はフロリーナとはまた違う紫色の髪をした美少女がいた。

様子を見ているとお腹が空いているようで車の中の食べ物をよだれを垂らして見ていた。それを見ていたので俺は食べたいと聞いたら物凄い勢いで頭を縦に振つてきた。

面白い美少女だなと思ひながら開けてお腹が空いている美少女にご飯を渡した。するとありがとうございますと言つて食べ始めた。

物凄い勢いで食べて余程お腹が空いていただろうと見ていたら親友がちよつとイレース、また食べているのかいと言つていた。

もしかしてこの子はこう見えて大食いなのと見ていたら確かに普通の量ではないなと感心した。これはまた面白い子だなと思いながら見ていると一人の巫女さんみたいな美少女がこちらに向かつて話しかけてきた。

「初めまして、初対面になります。私はサクラと言います。タクミ兄様の妹でございます。よろしくお願ひします」

聞いた俺もいやいや、こちらこそ宜しくねと伝えた。するとサクラちゃんがなにか言いたいことがあるようにはじられたのでなにか言いたいことがあるのと聞いてみると予想もしていらない答えが返ってきた。

「雅也さん、豊喜さんとは深い関係だと聞きました。もしかして豊喜×雅也みたいな関係ですか。私はどうしてもそれが知りたくて答えてくれますか」

おいーー！この子はこんな所で堂々と言うの？絶対に勘違いをされているよ。俺と親友はそんな関係ではない、普通に親友なだけだからと言つてから今からその証拠を見せるからと伝えて親友の元に向かつた。

親友がどうしたのかと聞いてきたので俺はサクラちゃんが俺と親友の関係を誤解しているからと言ふと親友は確かにそうだよなど言つてきたので俺は証拠として親友を抱きしめて体をスリスリさせ

た。

「やめろ、H A ★ N A ★ S E !! このホモ野郎！元の世界でもやつて来て いたがここでも同じ事をするな！」

「親友なんだからこれぐらいは大丈夫だよ、それに俺は久しぶりなんだしさ、良いではないか豊っち」

こんな光景を見たサクラちゃんは来た――――と喜びが感じられる叫び声を上げた。そして息を荒くさせながら

「これで当分のおかずは沢山あるから問題はなくなつた。とても最高の光景です、私はここまで頑張ったかいがありました」

すると今度はおかげの言葉でイレースがおかげ!?、どこどこと探し始めた。そして妹がやばいことになつていてる光景にどうすれば良いだよと泣き叫びそうなサクラちゃんのお兄さんのタクミがいた。

そしてそんな騒ぎにも気にしてないで己の計画を言つているナードエンの姿、これらを遠くから見守つてているフロリーナとリリーナ。

「リリーナさん、一段と賑やかになりましたね」

「少しばかり賑やかすぎる気がするけどね、フロリーナちゃん」

フロリーナは面白そうな笑みを浮かべてリリーナは子供を抱えながら苦笑いしながら光景を見つめているのであつた。

逆境から始まる反撃戦

色々とカオスな事になっていたがなんとか落ち着いてこれから的事を話し合いを始めた。そして話を聞くと殆どの領土を奪われて撤退して残っている領土に帰り、そこから何とかしようとしていたらしい。

なるほどなど思いながらこちらの兵力や向こうの情報を少しでも良いからと言つて教えてくれた。こちらは約2千の兵力に対して向こうは十万以上の兵力がいる。

その上で向こうのほうが精銳揃えでそれらに対抗できるのはこちらは十人ぐらいしかいないという兵力でも負けて実力でも負けている状況らしい。

それでも負けずに戦う意思はあると言う、俺は後はこの辺の地図はないかと聞いて見ると親友がどうして地図を見るのかと聞いてきた。

「何故つて、決まつているだろう。勝つためだ、地の利を得る為に少しでも情報が欲しいだ。もしかすると地形次第では十万の大軍と戦えるかもしねない」

「それは本当か！雅つち、どんな方法なんだ。頼むから教えてくれ。お前の軍略だけが頼りなんだ、教えてくれ」

「待て待て、それが出来るかを知る為に地形を知りたいのだ。まずは地図を持ってきてくれないか、ではないと判断ができないからね」

するとサクラちゃんがこの辺一帯の地図を持つてくれて俺は地図を見て色々と見落としが無いように調べていた。

その中で俺は気になる場所を指で指してこの辺はどんな場所だと聞いていた。そうして俺が出した答えは十万、全軍だと難しいがその半分までならば戦いができると考えた。

勿論、地形だけで見たらの話だ。実際は相手の実力によつて必要な兵力は変わつてくる、そして相手はどんな相手なのか。得意な戦法や戦い方など出来る限りを教えてくれた。

すると相手は戦術こそは上手いが重要なことを疎かしていることが分かつた、それは物資の補給線などその辺りが弱点と見た。

ならば取るべき策はできる限り直接な戦いはしないで物資で打撃を与えて戦闘継続を不可能にさせること。これならば相手が十万と兵力がいても戦いができる。

それに相手はいろんな世界から集まつた英雄たちと言えば絶望的に聞こえるかもしれないが逆に言えばそこまでの連携は取れないことでもある。

同じ国、又は同じ世界の人同士ならば連携は取りやすいだろうが違う世界の人までは取れない、多少は取れるだろうがスキは必ず生まれる。そこを付けばこの不利な状況を逆転できるかもしれない。

希望が見えてきたと思つた瞬間に親友の伝令兵がこちらに向かつてきて報告をしてきた。それは敵軍がこちらに向かつて追撃をして来ていると言うのだ。数は3千とこちらよりも数は多かつた。

それを聞いた他の者たちは慌て始めていたが俺はこの先にある小さな谷みたいな場所に誘導すれば勝てると思っていたのでその後に繋ぐことを考えていた。

親友が俺に対して何か策はないかと慌てて俺を掴んでいたが俺はあるから落ち着いてと伝えた後に皆に簡単に説明をした。

「今回の作戦を説明する、まずはこちらの2千を5つに分ける。疑問や質問は話が終わったら聞くので今は説明する。まずはこの先にある小谷みたいな場所で待ち伏せをする。リリーナさんは小谷の左で魔法部隊を率いて待ち伏せして下さい。右にタクミ君が率いる弓兵部隊も待ち伏せして下さい、兵力は500づつです」

それを聞いたリリーナさんにタクミ君は分かつたと言つてくれたので次の説明をした。

「次にサクラちゃんとイレースさんが率いるのは敵を谷に閉じ込めるための部隊、左右の谷の入り口を閉じ込めるために申し訳ないですが250づつでお願いします。イレースさんは敵が小谷に入り終えたら落石で退路をそしてサクラちゃんは誘導する味方が小谷から出たら落とす様にその後は縄でも準備して降伏してくる者たちは助けてあげて下さい」

この説明を聞いた二人は了解しましたと言つたらここで親友が笑みを浮かべてこちらに伝えてきたのであつた。なるほど釣りの伏せをするつもりだなと言つてきた。流石、親友だ。俺の考えが分かつたかと思つていたけど一応、説明をした。

「最後に3千の敵兵を小谷まで誘導する餌部隊、数は残りの全員です。これは親友とフロリーナさんそしてナーシエンさんにこれを率いてやってほしいのです。俺は次の布石の準備をします、これでお願いできますか」

するとお前は戦わないかと言われたが俺は全然戦つたことが無いから足手まといになるだけだからと伝えたら親友が嘘だと言つてき

た。

喧嘩やそれ以上の事をやつていただろうが嘘をつくのも大概にしろと言われたがそれでも次の布石の為でもあるから頼むと聞くとわかつたと言つてくれた。

タクミ君がついでにその布石はなんの為の布石と聞いてきたので俺は答えた。

「奪われた領土を取り返す為の布石ですよ、その為には少しばかり小細工をしようとしましてだから戦いに参加は出来ませんがこの作戦通りに行けば勝てる相手です。俺はみんなが戦いに勝つと信じて待っています」

タクミ君が少しばかり納得している表情では無かつたが了解したと言つた。他のみんなは概ね納得してくれていたみたいで事は進んだ。

俺はみんなと一度離れて奪われた領土を取り返す為の作業を始めた。それは奪われた領土の近くにある村や街に車で走り声をかける為にそう、勝つた後に敵を脅す為にいるはずもない戦力を相手に見せる為に。

その役割をやつてくれる人を村や街などで集めた。武装は村や街などに残っていたみたいでそこの心配は無かつた、それに元々親友を慕つていたので多くの者達が参加をしてくれた。

でもある人が本当に勝てるのですかと聞いてきたので俺は迷いもない声ではい、間違なく勝てますと返事を返した。

俺は次の作戦に協力してくれる人達を確保したのですぐに親友達

のもとに戻った。やはり勝つとは言つたが心配していないかと言わ
れるとそうでもない。

戦いは必ず勝てるほど甘いものではないから俺は急いで車を走ら
せて戻つてくると遠くからでも聴こえるほどの勝鬨の声が上がつて
いた。

その声は天まで届くのではないかという程で大勝利をしたのだな
とここからでも分かつた。俺はホツとさせながら戦いに勝つた親友
たちの所に車で向かうのであつた。

そう、奪われた領土を取り返す策を実行するためには！

勢いは大切だよね！

小谷周辺に戻つてくると親友たちが作戦通りに事が進んで大勝利をしていた。俺は流石、我が親友だなと思つていた。と言うか作戦通りに動かせる親友たちが凄いと言うべきだろう。

これならば次の作戦に移行できると考えてその内容を教えようと思いで親友の元に向かつた。親友の元に辿り着くと親友が嬉しそうにしながらこちらに向かつってきた。正直に言えば嬉しいのはこちらなのだけどね。

「雅っち、お前のおかげで勝てたぞ。ありがとう、これで残っている領土を守りきれる。でもそちらの方はどうなつている。本当に奪われた領土を取り返す事が出来そうか、無理なら別に構わないぞ。お前のおかげで守りきれて勝てたことだし」

親友が嬉しそうにしながらも心配そうにして聞いてきたので勿論だと言つて安心させた。まずはみんなの状況を見たいと言つてすぐに集めてくれるようにお願いした。この作戦はまじで時間との勝負になるからね。

集まつてきた皆が嬉しそうにしていた中で少しばかり不満そうにしていた人がいた、ナーシエンである。まあ、何となく理解はしていたが一応、彼の言い分を聴いてみた。

「なんでこの私が囮などしないといけなかつたのだ。もつと相応しい内容があつた筈だ。説明し給え、雅也」

皆がうわーと顔に出ていたけど俺はすぐに丁寧に落ち着いて説明をした。

「それは簡単なことですよ、誰がどう観ても立派で一番目立つナーシエンさんを討取れば一番手柄は目に見えています。だからお願ひしたのです、凹は一番この作戦で難しい立場です。そんな難しい事を出来るのはとても立派で優雅なナーシエンさんしか出来無いと思つたのです。ですがナーシエンさんをこんな難しい任務を与えてしまった不才の俺を許して下さい」

そう言うと機嫌が治つて何だそれならば仕方がないね、私はこの中で一番立派で優雅だからねと楽しそうに言つていた。

皆はナーシエンの扱い方がとても上手いと思いと見つめていた。まあ、これでも販売業で色々といろんなお客様を対応してきたから慣れていただけだけだね。その後すぐにこれから仕事を伝え始めた。

「戦い終えた疲れているかもしませんがここから5百名はこれから奪われた領土の奪還に向かつてもらいます。疑問がある方は話が終わつたら聴きますのでどうか話を最後までさせて下さい」

親友もここから5百名だけで奪還が出来るのかと疑問の顔をしてみていた。親友でさえこんな感じだ、他の者はもつと分からぬいだろうからすぐに説明に入つた。

「別にこれからは主に戦う必要はありません、あくまで脅して城や領土を取り返すのです。俺は皆様が戦つている時に各地の村や街などに向かいましてそこであることをする為に集めました」

フロリーナちゃんは俺の話を聞いてそのあることは何ですかと聞いてきたのですぐに答えた。珍しくフロリーナちゃんが発言するぐらいだから他の人も疑問に思つてゐるだろうしと考えたから。

「簡単なことですよ、擬兵すなわち幻の兵力を見せて相手が驚いて逃

げ出して捨てた城や領土を拾うと言う作戦です。相手はこちらが勝つたことは知られると思いますがどの様に兵力はどれぐらいなど詳しいことが伝わるまでは時間が掛かります。その間に奪われた領土を取り返すのです」

ここでタクミ君がなるほどそれで車で移動をしていたのかと納得の表情を見てた。そしてフロリーナちゃんたちも納得して分かりましたと答えた。するとタクミ君が考えてハツと何かに気がついて様子ですぐにならばこれは時間との勝負だねと言つてきた。

「はい流石でござります、タクミ君の言うとおりです。ここからは時間との勝負です、ですので豊つちには精銳の5百名を貸してほしいのです。これと俺が集めた擬兵で相手を脅し戦意を失くして城や領土を取り返す為にもお願ひします。それが次の策の布石になりますから」

俺は自信満々にそう言うと親友が呆れた顔でもう次の策を考えているのかよと言つてきた。勿論だと言つて俺は臆病だから次の手、次々の手を考えておかないと安心できない男だからね。

まあ、更に3つ目の手を考え始めているところだけね。それはまだ確定わけではないから言わないけどそれはともかくこれで自信がついた親友はどうとう俺に対して5百名の精銳を貸してくれた。

それとそれを率いる為にタクミ君とフロリーナちゃんが一緒に着いてきてくれた。これは心強いと思い共に行動した。これで奪われていた領土は奪い返せると確信をした。

親友たちはこのまま千五百の部隊を引き連れて本拠地に戻つてくれる様にお願いをした、子供もいるし疲れていると思うから。

そして二人にはこれからのことと詳しい内容を説明を始めた。その内容を聞いてタクミ君にフロリーナちゃんは何も反対することも無く分かりました信じてやつてみますと答えた。

それから俺たちは村と街の協力してくれる人たちと合流して奪われている城に向かっていた。そうして敵の城の近くで俺が大きな声で叫んだ。

「勝つた勝つた勝つたぞ、この戦い我らの勝利だ。盛大に教えてやれ、皆の衆。勝つた勝つた勝つたぞ」

そう言いながら俺は車に乗つて軍勢共に迫つてきていた。ついでにこんな事を言うのは相手に脅す為とこちらを勢いを付かせる目的がある。

意外にも有効的であるのだ、実際に日本の戦国時代に今の勝つた勝つた勝つたぞと言いながら敵陣に向かつていた戦国武将がいたぐらいだからね。しかもその武将は地味に有名だし。気になつたら戦国時代の北条家に関する人物だから調べてみてねと誰かに伝えるならばそう言うかな。

効果はあるのは歴史が証明している。敵はこの勝つた勝つたぞと後ろに迫りくる軍勢を見て驚いて城を守ることをせずに逃げ出した。

そうして敵が放棄した城に入り更に声を高く上げて天まで届くよう声を上げた。

「ハツハツハツハ、城も手に入りさらなる大勝利だ！勝つた勝つた勝つたぞ、勝闘を盛大に隣の城まで聞こえるように声を上げて教えてやれ」

付いてきた者たちも効果が出ていることが実感したので先程よりも更に声を高く上げていた。ここで取り返した城に百名ばかりの守備兵を置いて更に追撃を開始した。

もちろん進撃をしながら言うことは唯一、勝った勝った勝ったぞと言い続けているとこの勝馬に乗ろうと義勇兵も道中に参加して軍勢を更に増えたように見せながら奪われた城、領土に進軍をするのであつた。

その結果はすべての領土を奪還する事に成功したのであつた。タクミ君とフロリーナちゃんはお互いに物凄く喜んで声を上げて勝った勝ったぞと言つてくれていた。

さて俺は次に来るだろう敵の精銳達をどのように破ろうかと考えていた。まあ、この親友の領土。国境付近で良い戦場になりそうな場所を見つけただけどね。

そして国境付近の城や町並みを壊しても良いならば例え精銳数万でも勝てる策があるんだけど、それは親友と相談しないとな。

次に来るのは恐らく親友とリリーナさんを包囲していた者達だと思うからね。盛大にお礼をしないとね、俺の親友に手を出したという意味を教えてやるさ。

覚悟するが良い・・・敵の名前が全然わかつていないですけど！？・・・つか、アイクと言う人がいるだけしか分からぬや、親友に後で聞こうと。

英雄たちから見た蝮の評価

アクア王国で召喚士を務めている男は悩んでいた。数日前までのアジ・ダハーガを完全にあと一歩まで追い詰めたのにとある男が救い出してせつかくのチャンスを見逃してしまった事。

それだけならばまだ良かつた、けれど現実は甘くは無かつた。残党兵のみで追撃部隊を壊滅させた上に奪つた城や領土を軒並み奪い返されてしまった。

それも相手の被害は全くないというのだ、とても信じられない報告だが時間が進むにつれてそれが現実なのだと理解をした。

すると次に来るのは恐怖であつた、僅かの兵力であそこまで巻き返される実力が持つていて人物が敵に現れたのだ。

男は召喚している英雄達を集めて会議を開くことにした。なんどしても突破口を見つけないといけないと考えたからである。

そうして集まつたのはフオドラの英雄たちが集まつて話し合いをした、これから行動を決める為に。

「皆はもう分かつていてるかとしれないけどあのアジ・ダハーガをあと一歩まで追い詰めることが出来たが横槍が入り見逃してしまつたばかりかせつかく奪つた領土まで奪い返されてしまった。そのためには会議を開いて話し合いをしたい。みんなの意見を聞きたい、まずはクロードからお願いします」

そう言うとクロードと呼ばれている男が立ち上がり話を始めた。少しばかり余裕そうに見えるが実はあんまり余裕がなく内心は真剣であつたがそれを表情には出さずにいた。

「まあ、わかつてはいるかもしれないが素直に言う……敵に頭が相当冴えている奴が現れた。その上で俺らが見たこともない物も持っていた。動く巨大な鉄の箱、あれに激突したら深手は確定だろうな、現に先生はある鉄の箱に激突して未だに完治はしていない」

その場の人は真剣にクロードの話を聞いて考えていた。どうすれば勝てる事ができるのかと考えていた時にクロードがついでに追撃隊が破れた戦いを詳しく解説すると言つて解説をみんなにした。

すると知れば知るほど相手が相当な戦術の持ち主という事が分かるだけであった。

「地の利を生かし、それぞれ個人の特徴を最大限まで引き出す、そして迅速な行動力、どれを考えていても厄介な相手ですね」

発言したのはレスター諸侯同盟のリシリニアであった。彼女も相手の強さを確認してため息付きながら考えている一人である。

ここでとある女性が発言をした、その人物はエーデルガルト。フォドラ大陸のとある皇帝陛下であり、彼女自身も努力家であり天才と評価されている。そんな彼女がこれからのことに関する提案を出してきた。

「正直に言うわ、このままで相手の国力を回復してこちらが不利になるわ。ならばここは時間を置かずに攻めるべきと考えているわ。このまま時間が過ぎれば再び防衛陣が出来て突破するのは苦労するわ。ならばここは少し無理をしても攻勢に出るべきよ！」

その意見に大半が反対したが反対する者もいた、主な人物はディミトリである。彼もフォドラ大陸のとある王様であり、帝国にも負けな

い国を持っている。

彼はあまりにも危険すぎると言つて反対していた、それほどの者ならば反撃など予測してある筈だと言つてここは専守防衛するべだと主張した。

エーデルガルトの作戦ではあまりにも危険がありなおかつ勝つ見込みが薄いと言う事で反対していた。逆にエーデルガルトはそれはいずれこちらが負けてしまうわと言つてお互に意見を譲るつもりはなかつた。

「こゝで攻勢に出ないところまでの犠牲が無駄になる上に相手の国力まで回復させるのよ。こゝは多少の犠牲を出しても戦うべきよ」

「お前の多少は多少じゃないだろう、今は軍の士気も低下をしている時に先程の知らせを聞けばさらなる低下が出てくるのは分かつてゐるだろう。ここは一旦、体制立て直して落ち着いてから戦うべきだ」

「ここでクロードがお互に落ち着いてと言つてからそれならば皆がどちらの意見に賛成か聞いてみてからでも遅くはないじやないかと提案されてお互にまあ、それならばと言つてみんなの考えを聞いてみた。

半々で分かれてしまつたのでここでクロードが代案を出したのであつた。それは今回の戦いで相手を滅ぼす所までは攻めずにある程度の領土を取つたらこちらが回復するまで防衛すると言う考え方である。

お互いの考え方の中間辺りの作戦を出して来た、これならば相手に打撃を与えてこちらの危険もかなり少なくなると思うだけなどと言つ

た。

確かにと言つてだいぶみんなの考えが纏まつて方針が決まつてき
た時に会議場にとある人が入つてきたのである。その人物はエリ
ウッド、とある世界の貴族であり人望もある人物。

そんなエリウッドが慌てながら頼む様に次の戦いに一緒に連れて
行つてほしいとお願ひをしてきたのである。理由は奪われた城には
実はニニアンとニアンが置いていかれて捕虜にされたと噂で耳にし
たと言うのだ。

現実にこのアクア王国にニニアンとニアンが帰つて来ていないので
その噂はかなり信憑性が高いと考えられている。その為にエリ
ウッドは必死にお願いをしてきたがクロードはそれを断つた。

エリウッドは必死になりながらどうしてだとクロードの服を掴んで
叫ぶとクロードは真面目な顔で答えた。

「簡単な話だ、今の貴方に戦場を出ても感情的に動く可能性が高い。
相手は戦術がかなり上手い相手だ、一歩の間違いが全軍の命取りにな
る状況で勝手に動きそうな人物は連れていけない」

エリウッドはならば軍勢の邪魔をしないから、勝手に動く時は一人
で行動すると約束するから頼むと言つてきただがデイミトリがここで
優しくエリウッドに声をかけた。

「…分かつた、無茶な行動をしないと約束するならば俺が責任持つ。
エリウッド殿、約束してくれるか、無茶な行動をしないとそして軍の
迷惑に掛けないと誓えるか」

エーデルガルトとクロードが先程の話を聞いていたのと言つてき

たがデイミトリはこの男はおそらく無理矢理でもついてこようとするだろう。

そうなれば最初から一緒に目の届く場所にいてもらつた方がいいだろう、それにエリウッドも戦力になる人物だと言つてデイミトリの元で同行を許可された。

エリウッドはデイミトリに感謝の言葉を伝えると感謝は終わつてからで構わないと言つてこの先の事をどうするかを考えようと言つた。

そうして会議はなんとか進みその結果、エーデルガルト、デイミトリ、クロードを大将に指揮下にはリシリア、エリウッドなどの英傑を従え、兵力は総兵力の半分である5万ほどで再び侵攻を再開させた。

アジ・ダハーガに大きな打撃を与えるためにそして奪われている仲間を助ける為に出陣をした。刻一刻と決戦の時は迎えようとしていた。

その頃、螻たちは・・・

俺は戦いが一段落したので戦後処理をしていた、本当に色々とあって逃げ遅れた人たちを捕虜にして面倒見たり街の状況や城の修理、軍の再編成などする事が多かつた。

その上に親友は本拠地で内政などをして俺は前線のところにいるので会えない。仲が良い人といないと話すことが無いからつまらない日々を過ごしていたがその中でも最近、楽しい事が出来たのだ。

とても可愛い捕虜と一緒に休憩している時間が最近の楽しみである。本当にこのまま平和で過ごしたいなど感じながらゆつくりとしていた。昔からある花札で遊んで一時を楽しんでいた。

「あのー・・・普通に考えて僕ではなくてニニアンお姉ちゃんが来るような感じがするだけど気のせい?」

「まあ、気のせいじゃないかもしねないけど別にお姉ちゃんが嫌なわけではないけど男同士ならばこそ話せる事もあるし、俺はこう見えて男子高出身なんだ。こちらの方が落ちいて休憩ができると言うやつだ。それにニルス君は花札とか強いから楽しいからね」

俺はニニアンの弟である、ニルスと一緒に過ごしていた。全く、城の中に取り残されている人がいるなんてびっくりしたよ。俺はできる限り普通に接して怯えないようにしていた。

向こうから見れば俺は敵の大将の一人であり、この戦いに導いた男で戦後処理でニニアンちゃんがいろんな意味で危ない状況になりそうになつていたのでここは俺が欲しいと言つて守つたのは良かった。

でも向こうから見たらこの男がニニアンと言う美少女が欲しがつ

ている様にしか見えないから警戒心がとても強かつた。

まあ、ニニアンちゃんは普通に美少女だからな。それにニニアンちゃんには好きな人もいるらしく確かエリウッドだつたかな。その為にも余計に警戒心を出していた。

その時にお姉ちゃんを手を出すなら僕が先に相手になつてやると言つて出てきたのはニルス君で滅茶苦茶可愛いとすぐに抱きしめて何か一緒に遊ぼうかと頭を撫でながら言つた。

すると配下の一人がやはり雅也殿はホモだつたかと噂をしていた。違う、俺は子供が大好きなだけだ。子供を守るためにならばいろんな厄介事にも首どころが命懸けで突っ込んだこともあるだけだ。

ついでに何処からかこの話を聞きつけたサクラちゃんがこの光景を見た瞬間、雅也さん×ニルス君、全然ありだと思いますと危ない顔になりながら言つていた。

もうサクラちゃんが目をハートになりながら満足そうな顔をしてハアハアとしてみていた。それを見たニアン君が怯えながら抱きついてきた。こら、子供を怯えさせるなど怒ると猛スピードでお前はーと言いながらサ克拉ちゃんを捕獲して見事な土下座をしたのはタクミ君だつた。

「本当に駄目な妹がご迷惑をかけました。ごめんなさい、お前も早く謝れ。相手も怖がつているだろう」

「・・・雅也さん×ニルス君×お兄様の伝説の3pもあり得るのでは。是非とも実現して下さい、そうすれば当分どころが一年間ぐらいは戦えます」

うん、手遅れだと言つことが理解できるね。タクミ君は泣きながら今度は迷惑かけないように言いますから許してくださいと言つてサクラちゃんを連れて行つた。

タクミ君は本当に苦労人だなとその時に思いながら見送つた。それからしばらくして打ち解けてこうしてゆっくりとしている訳だ。

本当ならば元のアクア王国にニニアンちゃんとニルス君を帰して上げたいところであるがそもそも言つてられないのが今の状況である。こちらは次の襲来してくるだろう軍勢を迎え撃つために準備をしているのだがその詳細などバラされる訳には行かない。

もし敵方にバレたらこちらがやばい状況になつてしまふから今は帰さずにこうして捕虜として暮らしてもらつている。

これで敵と戦つて勝てば二人とも俺の名前の元で帰せるとと思う。親友も余裕が出来れば許してくれるはずだ、許さなかつた時は承諾するまで抱きつくまでだ。

またいろんな人からホモ扱いをされるだろうな、そこまで言うほどホモに見えますか。俺だつて普通に美少女が好きだし男ですよ。

まあ、どちらかが異性になつたら迷いもなく告白と結婚を申し込むけど、それぐらいだぜ。それがホモだつたらしようがないけどね。

そんな事もして今日も平和に終わるかなと思つていた時にアクア王国に放つっていた密偵が戻ってきた。俺はニルス君をこの場から立ち去つてくれる様にお願いをして聞かれることもない場所まで移動を終えてから状況を説明してくれた。

説明を聞いた俺はなるほど今度はかなり本気に攻めてきたなと感じた。数万の兵力に親友から聞いた警戒しておくべき人物たちが揃っている。

対してこちらは集められても千人ぐらいしかいない、こちらの準備が万全で無かつたらどうしようもなかつただろうが残念ながら準備は終えているですよ。

二、三万ぐらいは倒せるほどの策をすでに完成していますから。後は実行に移すのみ、さてさて相手はどんな反応をするのか楽しみだな。

問題があるとすればニニアンちゃんの彼氏だと思うエリウツドという人物も同行しているという事だ。彼女と約束したから会わせてあげたいからどうやつて会わせるか。

あんな美少女と約束を破ろうなら一生後悔するのは馬鹿でも理解はできる。破つたら・・・そんなこと想像もしたくはない。

さて、どうするべきか。本当に頭が良い人がいたら名案が出てくるのにな、眞面目に孔明さんとか欲しいですよ。だつてあの人はリアルチートですから。

そんなことを嘆いても何も始まらないか。今は出来ることを一生懸命に頑張るしかない。それに相手に孔明クラスの人物がいたら一巻の終わりだし、ここは全てをやつて時の運に任せてみますか。

運が全く無いやつがやる行動には思えないけどな、そう言えば策の中心となる場所に住んでいる人たちの避難は終わつたと訪ねてみると全て完了していつでも策に移せますと密偵がそう話した。

そうか、ならば俺たちも待ち伏せをしないとなと思つてすでに待機させていた千の部隊で最前線基地になつてゐる砦の近くに向かつて進軍を始めた。

もちろん、向こうに知られないように隠れながらの進軍なので普段よりも遅いがそれでも予定には間に合うようになつてゐる。

後は俺が頑張つて作り上げた巨大な罠にどれだけの被害を出してくれるか。それに掛かっていた、これで大成功ならば今後の策もやりやすいが失敗でもしたらかなり劣勢になるだろう。

そう考へながら俺は無事に今後の大きな分かれ道になる地に到着をした。後は敵の到着を待つだけだと思いながらその時を待つているのであつた。

そして到着して翌日、その時が来るのだつた。

蝮の策

クロードたちは途中に何も障害になることは起きず、予定通りに進んでいた。余りにも起きないのでエーデルガルトは少し不安になっていた。

もしかして罠ではないかと考えていたところ、クロードが何かエーデルガルトの表情を見て理解したのか、クロードが元気良くしつかりしろよと言つてくれていた。

そうしてとうとう敵の前線基地と呼べる城に到着した。でも城下町はもちろん城の中も誰もおらず、空城状態になつていた。

この様子を見て、エーデルガルトがこれは何が起きているだと疑問になつていて。エーデルガルトもこれは何かあるのではないかと言つて、クロードは考えてもしかするとと言つて考えを伝え始めた。

「俺の考えが正しければここに兵はない、そもそも相手は残党兵から立ち直つたばかりで、数は限られている。増えてもまだ新兵でそこまで使えるとは思えない。となると恐らく次、または次の次の城辺りが罠があると考えている」

なんでそんな事が言い切れるのと疑問に思つた者がそう尋ねてみると、相手も余りにも急に勢力が戻つて維持ができないだろうと睨んだらしい。現にこの前の戦いも正規軍ではなくて相手の義勇軍と呼べる組織だつたことは記憶に新しい。

もし自分が相手の軍師ならば、次のところで軍勢を集めさせて策など使つて戦うと言つた。それならばすぐにでも進軍させた方が良いのではないかとエリウツドが言うと、クロードが呆れながらエリウツドに言うのであつた。

「貴方は今回は作戦を言う権利を与えたつもりは無いだけどな、それに今から進軍はあまりにも危険すぎる。今宵は新月、松明などの明かりがないと周りも見えないぐらいに辺りは真っ暗になる。そんな状態で進軍すれば格好の餌食だ、今日はここで休憩して明日の朝に進軍を再開させる」

それを聞いたディミトリも確かに暗闇の中で進軍はとても危険すぎると言つてディミトリはエリウッドに明日になればまた進軍するから今宵は英気を養うということで休むのはどうだと言つた。

エリウッドも分かりましたと言つて頭を下げてその場から立ち去つた、クロードは全く困つたもんだなと言いながら軍勢に今日はこの城で休むと言つて準備に入つた。

もちろん夜襲なども考えられるのでいつもよりも多く松明の火を置くように指令して城の中で明日の予定を話し、クロードたちも眠りにつくのでだつた。

その日の深夜に兵士たちが外で騒ぎ出して目が覚めたクロードたちが外に出ていると城などに炎が移つて炎上をしていた。それは城、全てを燃やしつくそうとするほどの強さでここにいれば間違いなく焼け死ぬと分かるほどだつた。

エーデルガルトやディミトリは兵士たちが火の不始末でもしまつたのかと言つていたがここでクロードがやられたと言つてすぐに大声で叫んだ。

「全軍、急いで城の外に逃げろ、これは敵の罠だ。この城 자체が巨大な罠だった、城の外にある川まで逃げる。炎は川まではやつてこない、落ち着いて態勢を整えて逃げるぞ」

エーデルガルトやデイミトリはまさかと言つたが今は聞いている場合ではない、すぐにでもこの場から逃げ出さないと焼き殺されてしまうと考えて出来る限りの兵を纏めて城の外に避難した、その時である。

城下町にある家から爆発ともに燃え上がつた、クロードたちは爆発で部隊が被害を受ける覚悟で强行突破をした。それしか生きるために道はなかつたから。

ここで更に兵士たちを犠牲を出しながら城の近くにある川までクロードたちは生き延びる事に成功した。そこでクロードたちは部隊の被害など確認をしながら話をした。

「くそ、俺の考えが甘かつた。まさか、自分たちの領土であんな事をしてくるとは・・・蝮、俺の想像を遥かに超える奴だ」

「クロード、あなただけの責任では無いわ。私ももつと警戒しておくべきだつたわ、今は体制を立て直して次に備えないところで終わりとも考えられないから。今度こそは対応して反撃をしましよう」

エーデルガルトがその言葉を言い終えた瞬間、遠くからなにかの音が聞こえ始めたのである。なんの音だと考えているとデイミトリがすぐに叫んで皆に伝えた。

「洪水だ、川から離れろ！」のままだと巻き込まれるぞ、エルもクロードも早く！」

必死にようやくここまで逃げ延びた者たちに待ち受けていたのは洪水、マムシが密かに作つていた防波堤を決壊させて中流付近にいた者たちを飲み込んでさらなる被害を出した。

エーデルガルト、ディミトリ、クロードたちはなんとか川の洪水に巻き込まれる前に逃げ出す事に成功したがここでディミトリがあることに気がついたのである。

それはリシリニアとエリウッドの姿が見当たらないと言うのだ。本来ならば探ししたい所であるがこのままだと相手の策の餌食になつてしまふと考えて一度、敵の領土から離れようと撤退を始めた。ここから一番近いのは森から入つてそのまま直進するコースが一番の近道であつた。

幸いな事に新月でもあるので姿は見えないはずで追撃は来ないと思つていた時に待ち受けていたのは兵士たちから敵の攻撃を受けたと悲鳴を上げて怪我をした者たちが現れ始めた。

そんなはずは無いと三人は思いながら辺りで人の気配を探つてみたがその気配は無く静かである。それが逆に兵士達に恐怖を与えて部隊は崩壊寸前の状態になつていた。その間にも感じることもない攻撃を受けては部隊は混乱を起こし乱れていた。

三人とも何も言つてもいないのに同じ事を考えていた、悪い夢ならば早く覚めてくれと必死に思つていた。しかし、現実である。

三人は敗走になりそうな部隊をなんとか維持しながら森を抜けて命ながら逃げ出す事に成功した。そこで今度こそ一息をつけてから被害の方を確認することになった。兵士たちも助かつたと言つて座り込んでため息をついていた。

その結果、5万ほどいた兵士たちが1万ほどまでしかいないのだ。単純に考えて僅か一夜にして4万の兵を失つたのだ。

その上で相手の被害は城と城下町を崩壊させて使えなくなつたと言えば聞こえは良いが実際の被害は全くない。敵兵の一人も討取れなまま、4万の兵を失つた。

これ以上の負けが存在するならば聞きたいぐらいの敗北であつた。もちろん戦いなどできる状態ではないので何も戦果を挙げられないまま国に戻るしか道は無かつた。

国に戻るとエーデルガルト、デイミトリ、クロードの三人はアクア王国から戦犯をやらかした者達ということで城の監獄に投獄された。

他の者たちもあまりにも酷い負けだつたので誰も弁護の声は上がらずそのまま牢獄に入れられてしまつた。

そしてアクア王国は改めて感じるのであつた、本当の強敵はアジ・ダハーガではない、一匹の毒蛇である事に。

大勝利の後・・・

想像以上の戦果だな、俺は自身で考えた作戦があまりにも想像以上の戦果を上げて困惑していた。

本来ならば一万から二万ほど倒せたら良いと思っていたのに四万・・・作戦を考えた俺が言うのも何だが向こうの国と軍を指揮していた人たち大丈夫かな。こんな負け方をしたら責任取つて死ねとか無いよね、中世の時代ならばあり得るかもしないけど。

と言うか相手は国の維持だけで精一杯になると思うからここからは内政に力を入れて国を豊かにしないと。それでもこの勝利は大勝利だけど色々と反省点が多い、一番良い勝ち方は誰も犠牲を出さずに勝つこと、味方はもちろん、敵も。

しかし、今回は味方こそは被害は無かつたが敵の被害は甚大であり、本当の天才ならば被害を出さずに勝てただろうにな。

俺は次はもつと良い策を考えないとなと思いながら辺りの状況を確認していた。この地域の復興は文字通り1から作り直さないとど思い、どの様に街を作るか、そしてこの地域を守るために城をどうするか、意外とこのようなことを考えるのは好きである。

今度は前よりも要塞化してこの地を敵国に対する防波堤代わりにしようと思つてゐる時に勝つたのでこの地に来たいと言つていた、ニアンちゃんとニアン君を呼んでいた事を思い出してすぐに迎えに行こうと向かい始めた。

その時に瓦礫が動いたような気がしたが今は二人を迎えて行くのが優先だと思つて気にしないで・・・やはり気になると思つて瓦礫をどこかして見るとそこには美少女と言えるほどの少女がいた。

なんでなんで子供とかこの地域の住民は避難は終わらせていたはずだ。でも現実にこの子が傷ついている、俺は全力で担いで衛生兵！衛生兵！と叫んで助けを求めた。

俺は密偵ーーーと内心で叫んでいた。あれ程、確認してよな、子供とか残つていないよなと言つたのにいるじやないか。とにかく今は治療させないとこれで死んだら一生後悔すると思って走つて衛生兵がいる場所まで到着した。

俺はぜえぜえと息を荒くして呼吸を整えていた。流石に子供を抱えて走つたから疲れた、でも衛生兵の話だと助かるみたいだからそれを聞いて安堵してその場に座り込んだ。

マジで良かつた、本当に焦つたよ。でも助かるならばひとまずは良しかな、それとこの子の親も探さないとな、明らかに俺の責任だし大変でも頑張らないとそう決めた時、少女が目を覚ましたのであつた。

俺は優しく声をかけた、名前は分かる。親が何処にいるのかも分かつたら教えてほしい。そう言うと少女が私を子供扱いしていますよねと言つてきた。俺は勿論だと真っ直ぐな目で返事をしたら少女がこちらに対して。

「私を子供扱いして、いい度胸ですね。今すぐその訂正しないと痛い目に遭わせますからね、覚悟してください」

うんうん、可愛い子供の反抗期だなと思いで見ていた。少女はほっぺたを空気で膨らませて怒つていたけど可愛いだけだからと笑って返事をしたら。

これでも同じ事を言えますかと言つた瞬間、こちらにも聞こえるぐ

らいの大きな腹の音が聞こえた。少女は顔を真っ赤にして黙り込んだ、お腹が空いているのかと思つて何か食べ物を渡そうとしたが生憎な事にその時に持つっていたのは饅頭だけであり、好みかなと心配になりながらも聞いてみた。

「そうか、お腹が空いているなら饅頭しか手元にないが食べるか、お嬢ちゃん。この饅頭はかなり美味しいだよ」

「お嬢ちゃんは余計です……ですが貰つても良いですか」

俺は勿論だと言つて持つていた饅頭を渡して少女が食べると美味しいと言つて物凄い勢いで食べ始めた。相当空腹だつただろうなと思つて俺の手元にある予備の饅頭もあげた。

基本的に和菓子は誰にも渡さない主義だが子供がお腹を空かせていたら話は別だ。大好物でも渡す、それが俺の信念だ。

それにこんな事もあろうとたくさんの中の予備があるのだ、もう少しだけ持つてくるかと思つてその場から離れようとした時に少女が俺に話をしてきた。

「その……ありがとうございます、素直に助かりました。貴方は恐らくアジ・ダハーガ側の人間ですねよ。どうして私を助けたのですか」
うん?もしかしてこの子は戦いに参加していたの、こんな歳で……
でも今はこの子の返答をしないと考えて俺はすぐに返事をした。

「まあ、簡単な話だよ。助けたいから助けたそれ以上でもそれ以下でもない、逆にそれ以外の理由はないと言われると困るかな。そうだ、自己紹介がまだだつたね、俺は吉田雅也、どこにでもいる普通の社会人だ。まあ、変わつてい所があるとすれば中二病が現役というだ

けかな」

「助けてくれたお礼です、私はリシリニアと言います。あなたに恩を返すまでは無闇な抵抗はしませんからここで待っています。貴方の決断を」

いやいや、そんな怖い事はしないからね。それとそろそろ饅頭でも取りに食料庫に行きますか。俺はそれで食料庫に向かつてみると俺の目を疑つた。

あれ程、たくさん用意をしてきた饅頭が半分以上無くなってきたのだ。可笑しい、俺はまだ食べていないのに無くなるなんておかしいだろと思つて原因はなんだと思つていたらゴソゴソと物音が聞こえて来た。

まさかと思つて向かつてみるとそこには幸せそうにしながら寝ているイレースの姿があつた。そして口元にはあんこがついていたので犯人は間違なく彼女だ。

・・・俺は許せない事は大きく三つあるのだ、一つは親友を害する者、二つ目は子供に対する非道なことをするやつそして最後は俺の和菓子を勝手に食うやつ。

イレース―――、貴様!!そんなに俺を怒らせたいのか。貴重な和菓子を食べやがつて文字通りに体でその言葉通りに犯してやろうか。と言うかいつの間にこの場所に来ていたのだ、戦いに呼んだ覚えは無いですけど。

他の食べ物ならば笑つて許してやるが和菓子だけは話は別だ、落ち着いたら絶対に最低限でも胸とかその辺りを使わせてもらうからな!

俺の分が・・・でもリシリ亞ちゃんと約束してしまつたから破るわけには行かないよなと溜め息をつきながら残つてゐる饅頭を持ち出してリシリ亞ちゃんの所に戻つてきた。

リシリ亞ちゃんがこちらに對して何か向こうで叫んでいましたけど大丈夫ですかと聞いてきたので俺は苦笑いでまあ、少しばかり予想外なことが起きただけだから心配しないでと答えた。

そうして約束通りに饅頭をリシリ亞ちゃんに渡して俺はそれをゆつくりと見ていた。リシリ亞ちゃんが元気になつて良かつたけどその代わりに俺の和菓子が・・・親友に泣きついて作つてもらおうかな。

俺はそう思いながら落ち着いてきたリシリ亞ちゃんに休むようにお願ひをして今度こそニニアンちゃんとニルス君が来る予定の場所に向かい始めるのであつた。

不幸は突然に・・・

そろそろ二人が付く頃だなと思いつつ待っていた、逃げ遅れた人たちを捜索して救出しているからその中にエリウッドと言う男性がいれば良いのだけど。

いなければ謝つて許してもらおうと思つていると遠くからニニアンちゃんとニルス君がこちらに向かってくるのが見えてきたので俺はこちらだよと手を振つて気づかせた。

すると二人ともこちらに向かつて来て合流した、二人ともやはりエリウッドは見つかりましたと聞いてきたのでそれは捜索最中だと言葉を返した。

そうですかと言つてニニアンちゃんは落ち込んだ、そうだよね。好きな人がいるかもしれないと思つてきてみるといらないからね。それは落ち込むよなと思い、ここで好きな人の特徴を教えてくれると助かるけどと言つて特徴を聞いてみた。

ニニアンちゃんはそうして教えてくれたのは良かつたけど全然わからない、格好いい事に赤髪という事しか分からなかつた。まあ、良くここまでイチャイチャしてよほどの仲なんだろうなと思つてみると急に嫌な予感がしたのである。

こう見えて野生の勘と言うやつなのか、意外にも鋭いのだ。それが感じたという事は近くに俺にとつて見れば危険な存在がいるという事になる。

すぐに辺りを見渡して危険が無いかと調べ始めた。ニニアンちゃんとニルス君はどうしたのと心配そうにしながら聞いてきたので俺は実は嫌な感じをしてなど返事をして警戒していた。

すると人の気配を感じる所を見つけた、俺は隠れていないで出て来いと言つても出てこなかつたのでない・・いや、この感じはいると思つてどうしようと考えた。

このまま通りすぎれば不意打ちを食らうし、だからと言つて俺が様子を見に向かえば攻撃を食らうかもしれない。本当にどうしたもののかと悩んでいるとニルス君が僕が行くよと俺に静かに伝えて俺が気になる場所に向かってくれた。

俺は危ないから下がつてと言おうとしたその時である、草むらから剣が現れて一瞬でニルス君を斬りつけたのである。余りにも衝撃な事が起きて一瞬だけ時が止まつたようになつたがすぐにニルス君のところに駆け出した。

斬りつけただろう人物も現れて啞然としていたが今はそんな事はどうでも良いと思いニルス君の所に向かうと体に切りつけられた傷が深く血を流していた。不味いと思つて持つていた傷薬を使つていたがそれでも治すことは出来ずに必死になり大声で衛生兵！と叫んだ。

しかし、近くには誰もおらずどんどんニルス君が弱まつていくのが理解した。隣にはニニアンちゃんが嘘、嘘と泣き出しそうな声で震えていた。

俺は必死にしつかりとしろと声を掛けて意識を取り戻そうとしたが意識は無く生命の鼓動も消えそうになつていた。助かる方法はないと必死になり考えたが何も対策は出来ずに死んでいくニルス君を見守るしかなかつた。

ここでニルス君が意識を取り戻して姉さんはと小さな声で話した、

その声にすぐにニニアンちゃんは反応してしつかりしてと泣きそうになつてニルス君に声をかけた。

するとニルス君は実の姉である、ニニアンちゃんに「ごめんなさい」と謝つてそのまま動かなくなつた。ニニアンちゃんが嘘、嘘よ、嘘だと言つてと言い泣きながら泣き叫んでいた。

その光景を見ていたのは一人の男で俺は貴様と怒りを込めた言葉を出ししながら殴つて地面に叩きつけた。

「あの子は別に関係ないだろうが、子供だぞ。その上、お前たちの仲間だつたのじやないのか。何か言つたらどうだ、言えよ。ニニアンちゃんの弟、ニルス君を返せよ」

それでも男は何も言わず啞然としてニニアンちゃんを見ていた。するとニニアンちゃんが静かに立ち上がつた、その立ち上がつたニニアンちゃんは怒りが表に出るほど溢れており静かに男に対して言葉を出した。

「エリウッド……エリウッド、貴方だけ……貴方だけは絶対に許さない。喰い殺してやる！」

今、なんと言いましたか。この男がエリウッド!? そんな事があるのかよ。こんな事が起きて良いのかよ、余りにも無惨過ぎるだろと思つてみるとニニアンちゃんがいつも大切に持つっていた石が砕けたと思つたらニニアンちゃんが巨大なドラゴンになつた。

嘘!？、ニニアンちゃんはドラゴンだったの、それならばもつと仲良くしたかつた……つて今はそんなことを言つている場合はではない。

怒りのあまりに完全に我を忘れていると思ったその瞬間にドラゴ

ンになつたニニアンちゃんがエリウッドに対して氷のブレスを放つて攻撃をした。

エリウッドは何とか避けたと思つたがニニアンちゃんはドラゴンになつた巨大な手で避けたエリウッドに攻撃してエリウッドは避けきれずに攻撃を受けた、そのままニニアンちゃんは休む暇を与えずに攻撃を続けた。

血が流れて辺りが血だらけになつても攻撃を続けて俺は啞然としてみているだけであつた。ニニアンちゃんは弟の仇に対して殺そうと動いていた。

そうしてとうとうエリウッドは動かなくなり血が流れすぎて原型がもう分からぬ状態になりそくなつた物をニニアンちゃんは口に入れて宣言どおりに食い殺した。

確かにエリウッドが悪かつたしニニアンちゃんの気持ちも分かるけどだからと言つてもこんな光景はないだろうと恐怖で怯えながら見ていた。目の前で俺と同じ人間が食べられているのだ、可笑しくならない方が可笑しいと言える。

そうして弟を殺した者は食べ終えて落ち着くのかと思つていたら余りにも恐怖のオーラを出しているニニアンちゃんがそのままこちらを向いてきたのだ。

いやいや、こちらに来ないでください。せめて人間の姿に戻つてから来て下さい。その血の氣に走つてゐる表情をしながらこちらに来ないでください。

俺は恐怖の余りに動けずに尻もちをついて必死に手を動かして逃げ出した、お願いしますからこちらにと必死に心で願つていた時に向

こうはこちらの思いを無視をする行動を出してきた。

俺に向かつて氷のブレスを吐いて殺そうと準備を始めたのだ。嫌だ、こんな所で死にたくない、お願ひだ。豊つち、助けてくれと泣きながら願つて逃げていたがついに溜め終えた氷のブレスが放たれてこちらに向かつてきた。

ごめん、豊つち。お前とリリーナさんとの祝いを出来ずに・・・先に行つているよ。楽しい手土産を楽しみしているよと諦めて覚悟決めて待ち受けた。

しかし、その瞬間に遠くから雅つちーと叫び声が聞こえて氷のブレスが俺の前に来る前に巨大なドラゴンが現れて俺を守ってくれた。

俺はその龍は見たことも無いけど何となく分かる、この龍は豊つちだ。確かに龍だと言つていたけど実際に見るのは初めてだ。と言�かとても格好いいですけど触つて良いですか。

まあ、断りなくとも触りますけどと思いながら触れた。流石に格好いいと思いながら抱きしめていると抱きしめている龍に姿を変えている親友が俺に対して話してきた。

「こんな所でもそのホモを見せるな、雅つち」

そう言われたがとても嬉しいから良いではないかと言つたら親友が俺を咥えて背中に乗せてくれた上で真剣な声を出してきた。

「なんである龍が暴れているのか、そしてどんな人物なのか。自分は避けながら戦うから教えてくれ、雅つち」

そうして親友と俺は怒りのあまりで我を失っているニニアンちゃん

んと対峙をするのだった。

龍同士の戦い

俺は空中戦となりなんとも言えない状況になりつつも親友の動く速さに振り落とされないに必死になりながら親友にしがみつきこれまでの事を説明していた。

「豊つち、簡単に言うとニニアンちゃんとニルス君をこの前の戦いで捕虜にしていたけど仲良くなつて、エリウッドに会いたいとお願ひしたから会わせようとここに呼んだらエリウッドがニルス君を殺したらニニアンちゃんが我を忘れて暴れ始めたと言う訳だ」

親友は分かつたと返事をしてならば少し手荒い方法になるが仕方がないなと言つて何か準備を始めた。俺は手洗い方法つてと聞こうとしたら親友が少し後でと言つて更にスピードを上げた。

その速さに振り落とされない様に頑張つているとニニアンちゃんが氷のブレスを放つてきたが親友は避けて反撃した。こちらは炎を出して氷のブレスを押し返して向こうにダメージを与えた。

俺はマジでアニメしか見たこともない光景を見て感動と驚きを表情を見せながら凄いと呟いた。しかし、ニニアンちゃんもこれで倒れずにすぐに反撃をしてきた。

すぐに親友は反応して避けたがその時に起きたスピードの速さが俺の体を吹き飛ばすほど吹き、体が空に舞つたと思つたら物凄い速さで地面に向かつて落ち始めた。

俺は叫び声を出しながら親友に助けを求めた。親友が俺の名前を言いながらすぐに向かってきてくれたが親友のすぐ背後にはニニアンちゃんの姿もあり、俺は必死に後ろにいる！と叫んで必死に伝えた。

すると親友はそれでも振り向く事はせずに更にスピードを上げてこちらに向かつてきただがその間にもニニアンちゃんがブレスをいつでも放つ準備が終えてやばいこのままだと親友も俺も駄目だと思つて親友に必死に言葉を出して言つた。

「このままだと二人ともやられる、俺は良いから避けてくれ、豊つちー！」

「大丈夫だ、自分を信じてくれ。俺たちは親友だろ！」

親友が必死に言つてきたから俺は親友を信じることにした。豊つちならばきっと何とかなると信じて祈つた。そうしている間にも地面に落ちて激突する直前に俺を咥えて救出した。

正しく紙一重と言える状態だつたが助けてそのまま急上昇した、するとニニアンちゃんは余りにも急上昇に着いてこれずにそのまま地面に激突した。激突した地面一帯が氷のブレスによつて氷漬けになりその威力の高さが目に見えて現れた。

しかし、地面に激突した衝撃が凄まじいせいかニニアンちゃんは飛ぶ事はせずにただこちらに向かつて威嚇の咆哮をしてくるだけになつていた。

俺はようやく一息つけると思つてすぐに親友が考えがあると言つていたのでそれを詳しく教えてほしいと言うとすぐに答えてくれた。

「そうだな、あんまりやりたくないけどここは洗脳魔法で支配下に置いて落ち着いてもらうしかない。悪役みたいで嫌な感じだけど」

「!!豊つち、そんな事が出来るの。物凄いじゃないかどこでそんな事

ができるようになつたの」

「おいおい、自分はアジ・ダハーガ。すべての邪竜の頂点にたつ存在だよ。ドラゴンの一体ぐらいは出来るよ、と言うかもしかして忘れていた、雅つち」

はい、完全に忘れていました。ついついと言うと頼むからその事を忘れないでほしいと言われた。その後、すぐに魔法らしいものが親友から放たれるように発動した。

するとニニアンちゃんが急に苦しんでいる様に暴れ始めた。俺は本当に大丈夫だよな、これで失敗して死んでしまいましたとか言わないよねと不安に思いながら見守っていた。

しばらくすると先程まで暴れていたニニアンちゃんは不気味に覚えるぐらいに大人しくなり、親友が成功したと言つてから降り始めてようやく地面に戻つてから座り込んで安堵した。

親友が人の姿に戻れと命令するとニニアンちゃんはすぐに人の姿にの戻り大人しくその場で静かになつた。変わつた点があるとすれば目の色が赤く変わり大人しくその場にいた。

俺はこれからどうすれば良いと親友に頼むように聞いてみると親友は難しい顔をして話をしてくれた。どうやら竜族に現れる症状がなつておりこのままだと一生洗脳を続けないと先程みたいに暴れてしまうというのだ。

治す方法はないのかと尋ねてみると一応、ある事はあるが難しいと言つてきたが俺はあるなら教えてくれと必死に想いを伝えると静かに答えてくれた。

「このような状態になつた龍は狂龍化と言つて龍として生きるならば必ずと言つていいほど掛かつてしまう病みたいなものだ。そして発症すれば治すことはほぼ不可能・・・例外としてはその龍が狂つてしまつた原因を無くせば治すことができるかも知れないが」

なるほどその原因がニルス君だからどうしようもないという事が、でもそのニルス君を生き返すことが出来れば何とかなるかもしねいという訳だ。

ならば向かう場所はただ一つ、この世とあの世の境目の世界に向かつてニルス君を連れ戻すだけだなと思つていたら親友が真剣にこちらに對して話してきた。

「お前もしかしてニルス君を助ける為に無茶な事をしようとしているよな。辞めてくれよ、ほとんど赤の他人の為に命を張ることは無いだからさ」

俺はそれでも命を張ると決めたのだ、行くよと言おうとした時に親友の本拠地にいる伝令兵がこちらに向かつて来たのだ。それもかなり慌てているようでなんだと思つていたら信じられない言葉を耳にした。

それは親友の子供である、シンヤ君が神々に掛けられた呪いによつて倒れたと親友はすぐに飛んでいきそうだったのですぐに親友に掴んで体をマントや防具で固定した、その瞬間に親友は全力で飛んで本拠地に戻つた。

先程よりも早く飛んで固定しているのに必死にしがみついで本拠地にあつという間に到着して親友はすぐに人の姿に戻つてから城の中に入った。俺も親友に続いて城の中に入り込んだ。

そうして城の中ではまるで葬式の様に静かになつておりそこには親友の子供が布団で静かに寝ているようにしていたが腕や体には何かの模様みたいなものが現れておりそれが何を意味するのか、俺には分からなかつた。

ただ理解出来たのはそれがこの子にとつて死に繋がる何かという事だけが理解できていた。親友は自分の子供の小さな手を握り、頼む頑張ってくれと必死になつて祈つていた。子供の意識はなく親友が返事も何もないので必死に自分の子供に語りかけていた。

だけど医師の話だとどんどん弱まっており、もうあともつて数日だと言われた。親友とリリーナさんは嘘と言つてシンヤ君を握つてお願いと言つて必死に何とかしようとしていた。

それを見た俺はこのままだとあの子は助からないと思つてすぐにあの場所に向かう事にした。そこは世界と世界の狭間でありあの世とこの世の狭間でもある、異空間・・・きさらぎ駅に、そしてそこから北東にある黄昏の森、恐らくニルス君とシンヤ君はあそこにいる。

覚悟を決めて俺はその所に向かうために支度を始めていると丁度良くツクヨミが目の前に姿を表した。もしかしたらツクヨミならば簡単にきさらぎ駅まで行くことができると思ってお願いをすると向こうは驚いた顔をしながら俺に話した。

「貴方は狂気状態ですか、あんな場所に向かうなど自殺以外何者でもないです。ここ千年間、あの場所に向かい生き残つたのはたつたの一人なのです。それも幼い男の子でそれは運が良かつただけで・・・こ_こは素直に諦めてください」

「・・・ツクヨミ殿、親友の子供やニルス君の助けを諦めるぐらいならば死んだほうがマシだ。ならば少しでも可能性があるやつをするだ

けだ、それに俺はある場所に行つても他の者よりは成功する可能性は高いですよ」

ツクヨミはそれは何ですかと聞かれたので俺は堂々と返事をしてやつた。何故ならばツクヨミが言つていたその幼い男の子は……俺だから。

あそこがいかに危険な場所なのは知つてゐる、そして完全では無いがある程度は覚えている。7歳の時で非常に怖かつた場所であるが今は俺は27歳だ、二十年ぶりに向かつてやろうではないですか。

あそこにいる化け物たちに俺が成長して戦えるようになつた事を証明してやる、その為にもツクヨミ殿、頼みますとお願ひをするとツクヨミは説得をするのを諦めて最後に必ず生きて帰つて来てくださいと約束をお願いしてきたので俺は勿論だと元気よく答えてツクヨミは転移魔法を発動させた。

その時にここに意外な人物が現れて一緒に転移をしてしまつたのであつた。そうして二十年振りにきさらぎ駅に到着したがここで一緒に巻き込まれてしまつた人物が俺に向かつて驚きながら話した。

「……は何処なのかい、私と一緒に転移したのは問題が起きたのかな。ならばこのナーシエン様に任し給え、光栄に思うが良い」

よりも寄つて少しばかり面倒な人ときさらぎ駅に來てしまつたと俺は思うのだった。大丈夫かな、俺たちは。

オープがあるなら召喚したくなるよね!?

どうしよう、一人で何とかするつもりだつたのに転移をする前に結界内にナーシエンが入つてくるとは思わなかつた。

この人は少しばかり気が難しい人だからこんな所で一緒にいたくない。だつて勝手に動かれるとすぐに死に直結する場所にいるのだから、素直に従つてほしいのだけど。

それよりも今はナーシエンにどのように説明しようかと思つて話をした。ここはいつも通りに下手に出て説明した方が素直に聞いてくれるなど考えながら伝えた。

「賢明なナーシエンさんは機嫌が良さそうにそうだね、賢明な私は既に理解をしているが一応、念の為に聞こう、感謝し給えよと言われて今から俺が言う言葉は真実であり偽りがないことをお伝えします」

するとナーシエンさんは機嫌が良さそうにそうだね、賢明な私は既に理解をしているが一応、念の為に聞こう、感謝し給えよと言われてから俺はこの世界のことそして目的を話した。

説明を終えるとナーシエンさんはなるほどねと言いながら大量の汗を出していた。これつて完全に予想外の反応しているけど必死に隠そうとしているなど理解したのでそこは深く聞かないことにしてこれからこの事を説明を始めた。

「それでこれからシンヤ君とニルス君を助けるために行動を移します。この場所は先程も言いましたが死に直結する場所があるので今回ばかりは俺に付いて来てもらつても宜しいでしょ?」

するとナーシエンさんは仕方がないなと言ひながら顔色は真つ青になつていた。この人は怖いのが苦手なのかな・・・いや、この場所

は誰も怯えるのが当たり前か、怯えない俺が可笑しいだけだな。

それはそうと駅について先程から気になつてゐる物があるのだが・・・あれつてオーブじやないか。ファイヤーエンブレムヒーローズに出てくるオーブだよね。

なんでこんなきさらぎ駅に落ちているのですか、しかもそこの数があるので上手く行けば召喚できるじやないかと思つたが肝心の祭壇が無い事に気が付いて落ち込んだ。

いや、この際だ、物は試しでFat eシリーズみたいにやれば召喚できるじやないか。アニメなどである程度は覚えているからやつてみるかと思つて準備をした。

幸いな事に鬼の集団は来ていなかつたので準備が出来た。ついでに鬼の集団は太鼓など鳴らしながら迫つてくるので分かりやすい。迫つてきたら逃げれば良いので今は仲間が増やせるチャンスなので頑張つた。

そして俺はアニメで見た事を思い出ししながら言葉を出したらなんかオープが光りだしてそれが真ん中に集まり光の柱が現れた。

もしかして成功したのかと思つて待つていると光の柱が無くなり現れたのはこの世の人とは思えないぐらいに絶世の美女が姿を現した。

思わずドキッとして見惚れてしまつた、俺が今までこんな女性がいたら嬉しいとか理想の女性とか考えていたけどそれを超える美女が目の前に現れたので顔を真つ赤にしながら俺は言葉を出した。

「どうぞ、どうも、どうも初めてして、俺は吉田雅也と言います。ど、

何処にでもいる男です。そこの美しいお嬢様の名前はなんと言うのでしょうか」

ドキドキ過ぎて全然言葉が思いつかずに少ししか言えなかつたが向こうは少し笑みを出して答えてくれた。その様子はまるで女神が微笑んだようにも見えた。

「私はデイアドラーと言います、でもごめんなさい。それしか覚えていないのです、申し訳ありません」

それを聞いた俺は少し考えた、なんだと考えて見てどう考へても俺が無理矢理召喚したせいだとすぐに理解してその場で土下座をして頭を地面に叩きつけんように何回も繰り返しながら謝った。

勿論のこと血が頭から流れても必死に謝罪を続けていたらナーチェンさんがこれ以上は命が危ないからと止めてきたが止めないでください、俺は俺がこんな事をして許せないのです。本当ならば最も心から謝罪をしたいのにと言いながら続けていたらデイアドラさんが慌てながら俺に対する言葉を出してきた。

「大丈夫です、記憶がないのは元からですから気にしないで下さい。それよりもここは何処なのでしょうか、教えてくれますか」

聞いた俺ははい、喜んで教えますと言つてすぐに顔を上げて説明を始めた。すると遠くからナーチェンが流石、豊喜の親友だなと言つて苦笑いをしてみていた。

その様に説明を終えるとデイアドラーは私が何処まで役に立つか分かりませんが頑張つてみますねと言つてくれた。俺はそこにいるだけでも俺は嬉しいです・・・って戦力になりそうな人を召喚できていないと思い出してすぐに残っているオーブで再び召喚の儀式を始め

た。

ディアドラさんは癒やしかは出来ただけど戦いに出す訳には行かない、今度こそ戦いができるそうな人が召喚できますようにと祈りながら俺は再び召喚をした。

先程と同じ様に光の柱が現れてそこから現れたのはこれもまた美少女と言える人物が現れた。赤髪で元気そうな美少女で名前を聞く前に先程と同じ様に自己紹介を終えてから彼女が話をしてくれた。

「私の名前はノルンと言うの、何か困った事になつてそうだから力を貸してあげるね、それとここはどこかしら、見た事もない建物もあるみたいだけど」

見た目通りに元気そうな美少女で武器は弓を持っているから戦いは出来そうだなと思つていたらナーシエンがものすごく慌てながらノルンちゃんに対して話を始めていた。

「わ、私はナーシエン、私も美しいと思つていたけどそれ以上に君は美しい。どうだい、ここを切り抜ける事が出来れば一緒に空の旅でもしないかい」

おい、こんな所でナンパをするやつが少しは考えてくれよ。でも先程もそれに近い奴がいたような気がするけどまあ、良いか。

確かにノルンちゃんは美少女だから気持ちはわかるけどさと思いながらみてオープの数を確認したら4つしか残つていないので召喚はできないなど諦めた。

流石にゲームみたいに連続で召喚をすれば必要なオープの数は減ってくれないようだ。でも一人よりは少しあは心強くなつた気がす

るからいざ出発しようとしたらここでノルンちゃんが少し恥ずかしそうにしながら頼み事をしてきた。俺とナーシエンは何だと思って聞いてみると意外な頼みであつた。

「実は私、ドジっ子だから持っているものを失ってしまう癖があるから武器以外の物を預かつてくれるかな、駄目」

おいおい、マトモだと思つていたらここでドジっ子を引いてしまつたわけか。その上にそれを聞いたナーシエンが私が喜んで持つてあげよう、感謝してくれよと言いながらノルンちゃんの荷物を持った。

絶対に普段ならばそんな事をしないだろうにこんな事をするなんて本当に惚れ込んだのだなと感じた。まあ、それは良いことだから問題はないけど。

このドジっ子が変なことをしなければ良いのだけど、でもこんな時に限つてやることがある意味お約束みたいなものだから対策を考えておかないといけないな。

それは出来るのはここから幼い頃に逃げることができた俺だけなんだから。覚悟を決めて俺はどうとう生きている間は来る事はないだろうと思つていたきさらぎ駅から外に出て歩みを始めるのだった。

きさらぎ駅の攻防戦

さあ、敵が来ないうちに移動をしようと考えて移動を始めていた。本当に久しぶりだなと思っていた。小さい頃に一度しか着ていなかったけど明確に覚えている。

それだけ恐怖だった記憶がある、出来れば死んだ後にここに来たかつたけど、今はそんな弱音を吐いている場合ではない。

仲間も増えたことだから可能性は上がっているはずだ。デイアドラさんは戦いに参加をさせるつもりはないですけどそれにしても知らないとはいえるんびりとやり過ぎなのではと思ってしまう。

でもこんな気持ちを理解してくれるのは誰もいない、逆にいたら困ってしまう。とりあえず危険な敵は周辺にはまだ来ていないので少しばかり落ち着きながら進んでいた。

俺はナーシエンは軍人だから大丈夫だけど他の二人は女性の上に軍人には見えないので体力が持つかなと思って心配そうな気持ちで二人に話しかけた。

「いきなりで本当にすみません、急に人助けに協力して下さいとお願ひをしてしまいまして・・・ノルンちゃんにディアドラさん、体力は持ちそうですか」

すると二人とも大丈夫ですと返事をしてくれた、ノルンちゃんはもともと義勇兵として戦いをしていたらしく体力には自信があるみたいであった。

と言うか義勇兵だつたのと思つていたらナーシエンさんがならば私のところで正式な弓隊の隊長をしてみないかと言つていた。すみ

ませんがナーシエンさんにそんな権限はないと思うのですけど・・・まあ、タクミ君の負担を減らせそうだから賛成はするけど。

ディアドラさんも何故か体力は保ちそうですと言つてからなんでも私も体力が持つのでしょうかと言つてきた。すみません、そればかりは分かりません。

記憶がない以上はどうしようも考えられませんからもしかしたら親友がなにか知っているかもしれないけどそれは目の前の試練を越えてから聞くことにしよう。

でもこれでディアドラさんが結婚して相手がいたらどうしよう、マジで見た目が好み過ぎるから困っている。絶対に記憶を無くしていいる状況つて好きな人は必ず存在しているのがお約束だ。

親友にあれ程まで寝取りは駄目だからなと言つていたのに・・・いや、言つていなかつたら寝取つていたかもしれない。それ程までに俺にとつてはディアドラさんは魅力的な女性であつた。

だからその・・・ディアドラさんが思い出して好きな男性がいたら俺は笑顔で見送りが出来るのであろうか。きっと出来ずに負け犬の様に泣き叫びながら送るだろ。

そう思うと悪い思いが出てくるのだ、このまま記憶が失つたままになつて欲しいと願つている俺がいる。そう考えると俺が嫌になつてくるよ、だからモテないだよ。

そもそもしながらしている内に目的の森の入口に到着した。俺はナーシエンさんたちに真剣な表情で話をした。

「ここからは更に危険な場所に入ります、本当に今だけでも構いません

ん。俺の指示に従つてください、それでもしないと命の保証はできません」

そう言うとナーシエンさんは汗をかき怯えながら承諾してノルンちゃんも顔色を悪くしながらわかりましたと言つてきたのにディアドラさんは当たり前のような顔をして分かりましたと言つた。

待つてくださいディアドラさん、メンタル面が強すぎませんか?!それとも記憶を失っているだけだから恐怖を感じないとか・・・ないない、この人はどんな人生を歩んで来たのだ。

親友からお前の人生は過酷すぎだろと言われているせいでメンタル面が他の人に比べたら強いと自信はあるけどここまで強い自信はないですよ。

もしかしてディアドラさんって俺以上に過酷な運命を辿つてきた人なのか。そうなると余計に俺の元に留めておこうとすると罪悪感が出てくるのですけど。

でもこの光景を見てここまで冷静とは・・・心強いと言うべきだろう。そう決めて俺たちはとうとう黄昏の森に足を踏み入れた。

森の中は不穏な空気が漂つていた、そこら辺から良からぬ気配を感じて油断は出来ない状況である。流石にやばいと感じているのかナーシエンさんとノルンちゃんは震えて歩いていた。

その二人を見てみると本当に申し訳ないと想いながら進んでいたけどこの光景を見てもディアドラさんは普通にしていた。

・・・もしかしてディアドラさんも実はここに来たことがあるのですかと言いたくなるぐらいに冷静であった。來たことがある俺だつ

て怖く緊張しているのにデイアドラさんはそのような様子は無い。

これでディアドラさんが強かつたら嬉しいだけどなと思いながら進んでいくと向かった先でやはりいたかと思いながら警戒を出していた。

魔獣と呼ばれている存在が目の前にいたのですぐに隠れる様に指示をしてそうして通り過ぎるのを待とうとした時に、デイアドラさんが倒せそうな気がするので攻撃しますねと言つて見たこともない魔導書を取り出して攻撃準備していた。

攻撃的過ぎませんか、流石にヤバいですよ。と言うか魔法を使えるのですかと思いをしてみていると何か光魔法なのか光が現れてもしかして記憶が無いだけで実は物凄い魔法使いなのかと思つていたら魔獣に向かつて巨大な龍の形をした光が魔獣に当たり一撃で仕留めてしまつた。

・・・・つ・・・つ、強すぎー！何ですかあれは一撃で仕留めてしまつたんですけど!? 真面目にわからないんですけど・・・分かることはこの中で一番強いと言う事だけは分かつた。

ナーシエンとノルンちゃんは啞然としていますよ、無理もない、自分もびっくりして信長の野望に出てくる顔芸二階堂みたいになつています。

良し、デイアドラさんも戦いに参加は決定だな。明らかに強さが違う、それにしてもここまで強い人が記憶を失うつてどんな事が起きたと言うのか。

もしかして悪の教団に連れて行かれて記憶を失わせられたとでも言つのか。なんてな、そんなアニメみたいな展開の訳がないよね。

・・・あれ？どこかで聞いたことがあるぞ。RPGの中でも屈指の悲劇と言われているバー巴拉の悲劇と呼ばれているイベントがあると聞いたことがあるな。

そのイベントは目の前でヒロインと言うか妻が寝取られるという最悪の結末だつた氣がする。本当に悲劇過ぎてどこのサークルゴリツチユさんの作品、BBライダーの主人公であるニースと同じぐらいに悲劇だと思つたぐらいだ。

それが確かファイヤーエンブレム、聖戦の・・何だつけ確かそのゲームだつた氣がする。そして男の名前がシグルド、普段なら名前も覚えられない俺が覚えるぐらいに可愛そうだと感じた。

もしかしてと思いでの俺は、ディアドラさんに声をかけてみた。もし、もしかしてこれでと思つて話をした。

「ディアドラさん・・シグルドと言う人物に心当たりとか何か感じることはしませんか」

「・・分かりません、分かりませんけど、何故だが懐かしく感じます。そしてそのシグルドと言う人に会つてみたいです。もしかしたら何か思い出せるかも知れません」

そう言つていたディアドラさんはまるで初恋をしている少女の様に見えていた。それで俺は本能的に理解をした、バー巴拉の悲劇である寝取られてしまうヒロインが今、目の前にいるディアドラさんといふことが。

俺の初恋は・・・いや、今は親友の子供とニ尔斯君の助けることをしてから後で考えよう。そう思いながら俺たちは前に進むのだった。

きさらぎ駅の退却戦

俺たちはディアドラさんやナーシエンさんにノルンちゃんのおかげで敵に遭遇しながらも何とか最深部まで辿り着くことに成功してきた。

ここまで来れば後は親友の子供とニ尔斯君を探しだせば後は元の場所に帰るだけ、出来る限りに急ごうと思いでの辺りを探し始めた。

この辺りは生死を彷徨つている人や亡くなっているけど余程の思いを残している人が辿り着く場所だ。厄介な者に遭遇しないうちに見つけたいなと思つて探していると何か厄介な方を見つけてしまった。

何だろう、亡者なのは間違いないけどただの人間ではない。亡くなつて亡靈は間違いないけどそれでも生前から人ではないと理解をした。それも神様の可能性が出てきた。

なんとなくであるけど漂う空気はツクヨミに出会つた時みたいな感じがする。それにしても負のオーラと言うべきなのか何か災いを受けて闇落ちしたような神様に感じられた。

となるとかなり危ないのでひとまず逃げることも考えていたら目の前でとんでもない光景が写つた。それは隣に親友の子供とニ尔斯君がいたのだからもしかしてあの隣にいる者は助けようとして現れたのか。

または二人を何かをするつもりで現れたのか、ともかくすぐに俺は飛び出して二人の元に向かつた。するとやはり現れたかと言つてきたが明らかに好意のような声ではなかつたのですぐに警戒して俺は

話を始めた。

「どうも初めまして、俺は吉田雅也と言います。その子達を迎えて来る為に参りました。出来ればこちらに渡して貰えると助かるのですが」

「……我が名はエンブラ……そうね、返して欲しかつたら一つお願ひを聞いてくれるかしら」

なるほど何かしらをやれという訳か、でもそれをやれば返してくれるという。少し気になるけどこれに乗ることにしよう、安全に二人を助けられる方法かも知れないから。

その要件とはと尋ねてみるとまずはこの血を飲めと言われた。まさかの血を飲めとは嫌だけど従うしかないかと思いでの飲み始めた。

意外にも血の味は悪くなかったけどこれで何をして欲しいのだと思つていたら向こうが少しばかり特殊な笑い方をしながら俺に而言つてきた。

「この子は渡そう……何故ならお前の身体をを頂くからな、恨むなら油断した自分を恨む事だな」

そう言つてエンブラは俺の近くで消えていなくなり何処に消えたと探してみると何処からか不穏な感じを感じられた。

この感じは間違いない、俺に憑依しようとしている。なるほど俺の体を奪つて何かをしようとしているな、でも相手が悪かつたな。

こう見えて憑依されるのは初めてじゃないだよ！3回目です、始まりはアフリマンと言う奴にそして二回目はロップツチに憑依されて

色々と対策や憑依された時の対応を教えてもらっている。その時に使う機会があるかとツツコミをしたけどそんな機会が来てしました。

憑依してきた者達からだけど、それで憑依しようとしてきたエンブラを逆に捕らえることにした。すると精神内でエンブラが俺に対し慌てながらツツコミをしてきた。

「いやいや、憑依されているのになぜ意識を失わない、精神を乗っ取れないのだ。貴様は何者なのだ、少なくとも只者ではないな」

「俺？・・・クツクツクツク、教えてやろう。我が名は吉田雅也、異世界より親友を助ける為に参上した者なり・・・後の細かい説明は既にしたことがあるから良いかな」

「いやいや、私は聞いていない！説明をしろ、人間。お前はどうして支配されないので。どんな理屈なのだ、さつさと説明しろ」

俺は素直に返事をした、慣れだととと言うとエンブラはそれで防げるかと言いながら怒っていたけど気にしないでと返事をした。すると向こうもこちらの対応するのが疲れたのか落ち着いてきた。と言うか飽きられているようにも見えた。

いつもの親友みたいだな・・・いつも飽きられているのかと思うと少し残念な気持ちになつた。ともあれこれで無事に親友の子供とニルス君を救えたことだし後は無事に帰るだけだ。

・・・まあ、それが難しいだけね。今の騒ぎで確実に気が付かれていると思うから急いで逃げないといけないけど子供に無理はさせたくはないからな。

そう考えている時にナーシエンが後はどうすれば良いかなと聞いてきたので俺は後は逃げるだけですと言つてから親友の子供を抱えて走り始めた。

仕事で重い荷物を運んでいた事がこんな所で役に立つとは会社は親友がドン引きするぐらいのブラツク企業だけど今は感謝をする。

お陰様で上手く行けそうだと思いながら走り続けていた。体力は大丈夫かなと思つていたけど何とか脱出地点まで逃げられてそのままの場から元の世界に繋がる穴に入り込んだ。

するとエンブラが俺に対してまさか、このまま連れていくつもりかと言われたのでそうだよと言うとお前は頭がおかしいのかと言われたのでそうちよと即答してそのまま元の世界に戻る事に成功した。

俺にナーシエン、ディアドラさん、ノルンちゃん、ニ尔斯君そして親友の子供は肉体が城にあるから今は魂だけの存在だけである。おまけに取り憑いてきたエン布拉・・・良し、全員いるなど確認した。

そうしたらディアドラさんからそれを取り憑いたままで本当に良かつたのですかと聞いてきたので素直に別に良いじゃないかと返答した。

だつて仲良くなつたら面白そうだしどと言つた、それはそれとして早く親友とリリーナさんにニニアンちゃんを安心させたいから向かないとそう思いながら向かおうとした時にニ尔斯君から俺に話しかけてきた。

「あの・・・助けてくれてありがとうございます。正直に言つてもう駄目だと思つて諦めていただよね、でも兄さんは諦めないで助けてくれた。本当にありがとうございます、それと姉さんは無事なのです

か」

俺は本当の事を話すべきかと考へてニルス君にニニアンちゃんが今どのようになつてゐるかを説明した。するとニルス君の表情がみるみる青ざめて声を震えながら助かるですよねと不安そうに聞いてきた。

正直に伝えた、可能性は低いけど俺は諦めないでニニアンちゃんを助けてみせる。ニルス君をきさらぎ駅から救い出せた様にと真剣な表情でニルス君に伝えた。

ニルス君はしばらく目を閉じて考へてから俺に対しても願いしますとお願いをしてきた。勿論だと返事をしてからまずは親友と合流が先と考へて俺たちは進み始めた。

そうしてしばらく歩いてとうとう親友がいる城に戻ってきた。までは親友の子供をもとの場所に戻さないと行けないと考へて親友とリリーナさんがいる所に向かつた。

そこでは自分たちの子供が目を覚まさないことで泣いて見守つてゐる。見ているこちらも辛くなるけどなんとかなつたから良かつたかもなど思いながら親友の子供に自分の体に戻りなと言つて元気いうんと言つてから元の場所に戻ると目を覚ました。そう言えば親友は靈感が無いから魂の状態だと見えていないのか。

すると親友にリリーナさんが驚いたと思つていたらすぐに嬉しくをして喜んでいた。泣き叫ぶのは良いけど俺の存在・・・気がついていないなこれは・・・まあ、見てやはり命を懸けた価値はあつたなと思つて見守つていた。

一緒に來ていたデイアドラーさんとニルス君はとりあえず親友にお

願いしたい事はあるけど言わず見守るのであつた。そんな待ちながら俺はニニアンちゃんをどうやつて助けるか考えて待つているのだった。

ニニアンちゃんの症状は決して軽いものではないから知恵を振り絞つて考えるのであつた。

ニニアン救出戦

しばらくして落ち着いた親友がリリーナさんに子供を託して顔を真っ赤にさせながら話を始めた。そんなに恥ずかしいことでは無いと思うけどな、でも良い記念になつたかも知れないと。

「急に見苦しい所を見せて申し訳なかつた、先程の光景は忘れてくれると助かる。まあ、雅つちは絶対に忘れないと言うだらうけど」

「当たり前じやないか、あんな珍しい光景を忘れろと言われても絶対に忘れないからな。どうしても忘れてほしかつたらいろいろな和菓子を集めて俺に与えたら忘れるかもしけないけど・・・どうする豊つち」

そう言うとならば今度、用意をするから忘れてほしいと言つてきたから忘れることにしよう。まあ、用意をしていなかつたら思い出すだけだしな、こんな面白い事を忘れられる和菓子を用意してくれよ・・・今はそんな事を言つている場合ではない。

ニニアンちゃんをどうやつて助けるかの会議をしないと行けないのに世間話など後だ！ そうして俺はとりあえずニルス君を連れ戻した事を改めて教えてから話を進め始めた。

今のニニアンちゃんは竜人、マムクート独特の症状を起こしている、それは凶竜化と言う奴で一度発症すれば元に戻すのは非常に難しいと言われている。

実際に親友がそれを発症して治つたのは数えるほどしかみたことがないみたいで非常に厳しい状態らしい、親友の豊つちは竜の中でも古参の竜でありそれが数えるほどしか治せていないとは・・・でも俺は約束したのだ、ニルス君に必ずお姉さんを助けるつて！

俺はどんな事でも頑張るから教えてくれとお願ひをした。すると親友はきさらぎ駅ぐらいに大変かもしれないが構わないかと聞いてきた。聞いた俺は愚問と返事をした。

そうして親友が数少ない助かつた方法を教えてくれた、その方法は聞いただけでもかなり難しそうだけどやるしかない。

まずは洗脳を解いてからまずは暴れない様にする為に体力を奪つてから結果を張つてからニニアンちゃんが心から好きな人が頭に触つて声を掛ける。一見すると簡単に見えるけど実際は物凄く難しいらしい。

そうかと思いながら考えようとした時に親友がため息をつくように意外な事を口にしたのだった。

「出来れば、竜に対する秘策のナーガの書があり使える人がいたのであれば心強いのだけどな。まあ、そんな都合よくいるわけ無いか」

・・・・・いるーーー!!ディアドラさんがまさにその人だ!本当に運が良いぞ、普段の運は最悪だけどこのような時の運はなんだかんでも良くなるからな。

ついでに運のなさの例え話では仕事場の先輩と一緒にパチンコで遊んだ時に先輩から何で大当たり濃厚を2回連続外しているのだと余りにも信じられないと言う表情で見られたことがある。ついでに周りの人からもあれでハズレるのと言われた。

その時は分からなかつたが帰つてから調べてみると当たる可能性が九割超えらしく、それを2回連続外す事などあり得ないらしいけど実際に起きたから仕方が無いじやん。

それ以外にも仕事場の先輩からどんだけ運が無いだよと言われている。まあ、それがガチャにも現れてオープを千個以上失つただけだね。

けれどもディアドラさんがいるならば助かる可能性が上がるのでこれなら希望があると思いながらディアドラさんに目をやつてから親友に対して話をした。

「豊っち、実はここにいる女性、ディアドラさんがナーガの書を持つている上に使う事もできると言う。まさに今のこの状況に一番頼りになりそうな人がいる、きっと上手く行くよ」

俺は元気に言つてディアドラさんは少しばかり恥ずかしそうにしていた、親友も喜んでくれるはずだと思つて親友の顔や表情を見るとそこには嬉しさも感じられたがそれ以上に感じられたものがあつた。

それは敵意、こいつは始末していたほうが良いと思つている顔をしていた。昔から敵意やこいつは死んでほしいなど親友が言つている時の表情に似ていた。

豊っち、この女性を知つてゐるの……と言うか何か因縁があるの。正直に言つて何もしないで欲しいのだけど豊っちがそんな簡単に引き下がるとは思えない。

ニニアンちゃんを助け出せたらこれはディアドラさんを向こうの陣営に引き取つてもらつた方が良いかも知れない。もしかしたら向こうにディアドラさんの知り合いとかいるかも知れないから引き取つてくれると信じたい。

少なくとも親友の事だ、日本の法律なんてここに無い以上は必ず仲が悪い奴だと用済みとなつた瞬間に切り捨てる様な所も考えられる。

一目惚れした女性をこんな事で死なせたくないからな。

全く一難去つてまた一難とはこんな状況のことを言うのだろうな。いい加減に災難は終わりになつてほしいのだけど。

でも俺の事だからそれを終えても災難が来るだろうな、考えたら嫌になつてくるので今は目の前の事に集中しよう。まずはニニアンちゃんを助ける、そしてディアドラさんを逃がす。

良し、今後の予定は決まり。そもそも考へてゐる内に準備は進み、そしてとうとう作戦を始めようとしていた。今回は俺はメインではないから援護するぐらいしか出来ない。

見守る中、豊つちが洗脳魔法を解いた瞬間に再びニニアンちゃんが暴れ始めた。結界を張つていると言つてもその衝撃波が離れているこの場所まで伝わってきた。

俺がどうにかできる問題では無いなど感じて素直に成功するよう祈つていたが一向に衝撃波が収まることはなく本当に大丈夫だろうかと心配になつて來ていた。

その時に俺に憑依をしているエンブラが語りかけてきた、このままでは成功は出来ないだろうと語つてきた。何でだと考へると流石に憑依をしているだけに考へが読まれたのかすぐに返答してきた。

(簡単なことだ、あの女を助けるには儀式の内容が弱すぎる。あのまま行けば先にあの女の命が燃え尽きる、見れば分かることだがな)

どうすれば良いだとエン布拉に聞いてみるとエン布拉は少しばかり楽しそうな声で俺に言つてきた。

(そうだな・・・お前の力を引き出せば救えるかもしれないぞ。お前に取り憑いて何で支配できないのかを調べてみたが・・・納得した。なるほど確かに支配する事はできないなど・・・な)

それは何、それを引き出せばニニアンちゃんを助けられるかもしないだろ。ならば引き出してくれとお願ひをした。すると信じられないぐらいの痛みを襲うかもしれないがそれでも構わないかと聞いてきたので当たり前だと返答するとすぐに体中が引き締められるような感覚に襲われて痛みのあまりに座り込んでしまった。

本当に滅茶苦茶痛いけどこれに耐えたらニニアンちゃんを救える力が手に入るかもしねない。耐えろ、俺！ニルス君と約束しただろう、姉さんを必ず助け出すつてこんな所で諦めるな。

子供を助け出せない時は俺の命日だと誓つただろ、ならばこれぐらいいの痛みなど飲み込んでしまえ、俺！！

すると痛みは続いているがなんとなくであるがニニアンちゃんを助ける方法が分かつた気がする。俺は痛みに耐えながらニニアンちゃんに近づいた。

痛いけど痛いけどニルス君やニニアンちゃんが受けた心の痛みに比べたらこんな痛みにもならない、待つてくれ、今そちらに向かう。

完全に顔色を悪くしているが皆、ニニアンちゃんの事で見えていかつたお陰で何とか邪魔をされずに到着できた。

息も荒くなつておりあんまり好意的でないエンブラも流石に危ないと言つてくれたが危ないのは当然のこと後はニニアンちゃんの敵意を心の底から溢れている怒りや憎しみを・・・抑える。

抑える事が出来ればニルス君の声がニニアンちゃんに届くはず、俺は残っている力でニニアンちゃんに触れて力をニニアンちゃんに對して流し込んだ。

俺はそこでとうとうその場で倒れ込んだ。すぐに気が付いたディアドラさんや親友が声を出して無事かと聞いてきた。見ての通りに無事ではないよ、けれどもそこまでしたからにはやはり効果が出ていた。

あれ程に暴れていたニニアンちゃんが先程とは変わつて静かになつてそして竜の姿で泣き出していた。怒りが無くなつたら悲しみか・・・でもこれならば声が届くはずと思つてニルス君に最後の力を振り絞つて声を出した。

「今だ、ニルス君！今なら姉さんに声が届く！心から叫べ！」

ニルス君はニニアンちゃんに触り必死に叫んだ、するとニニアンちゃんがかすかな声でニルスと喋つたと思つていると視線をニルス君に向けるとどんどん目の色に輝きを取り戻して泣きながらニルスと叫ぶと人の姿に戻り嬉し泣きをしながらニルス君を抱きしめた。

良かつたと息を荒くしながらも見届けて安心した瞬間、今まで抑え込んではいたものが一気に我慢が出来なくなり口から大量の血を吐血した。

周りの者が俺を心配してすぐに駆け寄ってきたが何かを言つているのは分かるけど何を言つているのかが聞こえなくなつていた。そうして意識もどんどん暗くなり目の前が真つ暗となつた。

とある記憶・・・

自分はこれまでかとと考えていた、必死にニニアンを何とかしようとしていたがどうやつても考え方通りに進む事はせずにどんどんニニアンが危険なことになっていた時にいつの間にか親友である、雅つちがすぐそこまで来ていた。

いつの間にここまで来ていたのだ、それに相当苦しそうにしており明らかに普通とは言えない状態だつた。あんな状態で何をするつもりと考えていたら親友から今まで感じられたこともない力が感じ取つた。

なんだ、この力はこれは人間が持つてゐるはずもない力、親友が先はどう言つていた。憑依しているエンブラと言うやつの仕業なのか。

これは邪竜クラスの力だ、だがあそこまでの力を引き出せば親友の身体が持たない。早く雅つちに辞めるように言わないとあいつが大変なことになる。

そう考え自分は雅つちのもとに向かう途中で雅也がニニアンに触れたと思つていたらあれ程に暴れていたニニアンが大人しくなつた。自分の洗脳魔法を使わずにそんな事が出来るのかと衝撃を覚えた。

その時にその場に倒れ込んだ、やはり無茶をしていたのかと思つていたら雅つちがニルスに対して今だと必死に語つていた。ニルスも雅つちの気持ちを汲み取つてすぐに行動に移した。

ニルスはすぐに姉であるニニアンに触れて必死に叫んだ。するととうとう声が届いたのかニニアンが声を震えさせながら向いた。

そしてニニアンは弟が目の前で生きているのが理解をしたら変身

を解いてから弟に泣きながら抱きついた。本当に良かつたなと思いながら見ていた、これに関しては自分も先程似た経験をしているから何と言わない。

それでも必死になつて助けてくれた親友である雅也にお礼を言うだけでもしてと言つて視線を雅つちの方に向いてみると口から大量の吐血して明らかに危険な状態と言える親友がいたのである。

すぐに親友の元に向つてしつかりとしろと叫んでも返事はせずそのまま目を閉じた。身体を確認するとどんどん弱まつていくのが感じられた。不味いとすぐに声を上げて周りの者たちを動かし始めた。

「衛生兵！衛生兵！早く来てくれこのままだと雅つちは死んでしまう。急いでくれ、頼むから」

それを聞いた者たちが時が進み始めたように動き始めた。ニニアンとニルスも己の恩人が危ない状態になつているのを確認するとぐに親友の元で向かい必死に声をかけていたが反応はなかつた。

その後、必死にみんなが頑張つてくれたおかげで親友である雅つちの命はなんとか繋ぎ止めることに成功した。けれども意識は未だに回復することはなかつた、身体は回復しているからきっとしばらくすれば目を覚ますはずだ。

それよりもここまでなるまで何で頑張つた、そしてなぜ近くにいるディアドラは何もしなかつた。自分はすぐにディアドラに問いただしたが必死になつて気が付かなかつたとそれしか音返答はなかつた。

やはり、お前は元々から親友の命を狙つていたのかと持つてゐる剣を抜こうとした時に近くにいたタクミが剣を抜こうとした腕を掴ん

でこう言つてきた。

「駄目です、豊喜さん。気持ちは分かりますけどここでディアドラを斬り殺したら雅也さんに何と言つもりなのですか。まだ、証拠もない中で殺せば雅也さんが悲しんで豊喜さんと雅也さんの間で亀裂が出来ますからここは落ち着いて下さい」

確かにタクミの言う通りだ、ここでディアドラを殺しても親友との間に亀裂が生まれるだけだ。ならばどうすれば良いと尋ねてみるとここは幽閉して様子を見てからでも遅くはないと返答してきた。

なるほど確かに悪くないか、ディアドラ。良かつたな、少しばかり寿命が伸びて命拾いしたなど考えながら自分は部下にディアドラを幽閉しろと言うところでディアドラと共に行動していたノルンが待つてくださいと言つて話してきた。

「待つてくださいー・ディアドラさんは私と共に雅也さんがあなたの子供を助けたいとお願いをしてきて頑張った中です。そんな雅也さんを危害を加えようとは思えません。どうか考え方直してください、ディアドラさんを幽閉しないでください」

そんな事は出来ない、万が一もあつてはならない為にもディアドラを幽閉しなければならない。ノルンには申し訳ないけど却下をしたらノルンがならば私も一緒に幽閉しますと言つてきた。

これは正直に言つて嬉しい提案だ、ディアドラと一緒に居たので怪しいと思つていたので自分から牢獄に入つてくれるならこちらも歓迎だ。

そちらの方は許可をして一緒に牢獄に入つてもらつた。後は親友の容態が回復するだけだけど・・・様子を見て来るかと考えて向かう

とそこには心配そうにして看病しているのが見られた。

自分はニニアンとニルスは信用できると思つてみていたらこちらに気が付いたのか、お辞儀をしてきたのでこちらも返してから話をした。

「どうだ、雅つちは落ち着いているか。二人には面倒を見てもらつて苦労させるな」

「いいえ、私とニルスの為にここまでさせてしまつたのです。できることはほとんど無いですがせめて看病したいと思いますので構いません」

ニニアンは申し訳なさそうにして言つていた。ニルスも僕も姉さんを助けるために・・・雅也さんが目を覚ますまで面倒を見ていていと 思いますと必死な顔で言つた。

そりかと言つて自分はいち早く、目を覚ますことを祈るしかできなかつた。それと目を覚ましたら親友に取り憑いている存在のことを詳しく聞きたいし、後はあれ程の力をどこで出に入れたのかを聞かな いと。

とにかく今は目を覚ましてほしいところ・・・万が一、万が一だけ ど親友があの者と関わりがあつたら自分はどうに接してやれば 良いのだ。

親友から感じられたあの力・・・自分が嫌つて いるあの邪竜と似て いた。これがただの自分の考え方過ぎなことを祈るばかりだ。

あいつが邪竜なわけがない、昔から駄目なやつで馬鹿なところも多 いけど邪竜じやないのは理解しているつもりだ。だから頼む、自分の

勘をここまで外れて欲しいと思ったのはいつ以来だろうか。頼む…
ハズしてくれ。

お母さん、お父さん…みんな、会いたいよ、会いたいよ、何で
誰もいないの？何で僕にみんな酷いことをするの、僕は生まれないほ
うが良かったの。

僕は○○○○、怖い人たちにお父さんとお母さんに殺されて僕は知
らない所に投げ捨てられた。怖いよ、怖いよ、お母さん。僕はどうす
れば良いの。

お腹が空いたよ、僕は泣きながら歩いていた。何かないかと宛もない
旅をしていた。いつ終わるか分からぬ旅を続けていた。

誰も助けてくれずに近くの洞穴に入つて寒さを凌いでいた。その
時にその洞穴の中に光っている物を見つけた。それは指輪で幼い僕
は泣きながら指輪を手にとつて助けて下さいとお願いをしてそのま
ま意識を無くした。

次に意識を回復した時には小さな小屋の中にいた、ここは何処なの
と思いながら辺りを見渡すと近くには一人のおじさんがいた。僕は
恐る恐るおじさんにおじさんは誰と聞くとおじさんは笑みを出しな
がら答えてくれた。

「おじさんは…まあ、困っている君みたいな子の味方かな。そして
君の家は何処かな、おじさんがそこまで連れて行つてあげるよ」

僕はもう帰るところもない待つてくれている家族はみんな死ん

じやつたと泣きながら答えるとおじさんは優しく子供を抱き包んだ。

よく頑張ったと言つて優しく包み込んでくれていた、僕は溢れ出でる悲しみを堪えることができずに泣きだしていた。そんな僕をおじさんは何も言わずに優しく包んでくれていた。

その後、帰るところもない僕はおじさんの元で暮らすようになつた。初めてのことばかりで大変だつたけどとても楽しかつた。おじさんも優しく、だんだんと寂しさなど忘れていつた。

時には僕を狙つた怖い人達も現れたけどおじさんが一人ですべてを倒して僕を守つてくれた、いつか僕もおじさんみたいな人になりたいと考えるほどに好きになつていた。

ある日におじさんから地元の人と付き合いなどしないかと言われた、僕はおじさんがいるから大丈夫と言つたけどおじさんは仲が良い人は多いほど楽しいよと言われたのでそうなのかなと思いながら僕は近くの村の人たちと付き合いを始めた。

最初はいやいやだつたけど徐々に仲が良い人達も出てきて楽しくなつっていた。僕が楽しく村であつたことを報告するとおじさんはそうかそうかと言つて頭を撫でてくれていた。

こんな楽しい日々が続くと僕は思つていた、けれど悲劇は突然に現れた。いつも通りに家に戻るとおじさんが居なかつた。時々、何処かに向かうから帰りが遅いなと思ひながら待つていた。

でもいくら待つても、いくら待つてもおじさんが帰つてくることは無かつた。

僕は・・・・見捨てられたの、なんで・・・・・・なんでなん

でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで僕が悪いことをしたの、謝るから出てきてと泣きながらそう願った。

けれど願いが届くことはなく一人涙を枯れるまで泣き続けた。そうしてとうとう理解をした、おじさんは僕の面倒を押し付ける為に村の人たちと仲良くしようと言っていたのか。

ならばそんな事にならなければきっと姿を見せてくれるよね。悪い事をすればまた現れて叱ってくれるよね。会えるならば怒られても良い、殴られも良いから。

だから・・・・・村人ヲ全員、殺サナイトイケナイナ。ソレデモ現レナカツタ時ハ・・・・世界ヲ殺ソウ。

俺はこれから夢の中で村人を殺そうと向かっている途中で目を覚ました。本当に今まで見た夢の中でもかなりの悪夢だと思うぐらいに恐怖を感じた。

少しばかり落ち着いてから辺りを見渡すと看病してくれていたらろう、ニニアンちゃんとニ尔斯君が疲れて眠つてしまっていた。

二人の光景を見て安心していた、だつて・・・・・二人ヲコノ手デ殺セルカラ・・・・今、俺は何を考えていた。可笑しい、何かが可笑しくなつていて。

分からぬけど分からぬけど、俺が俺で無くなつていてるような感じ。不味い、まずは意識があるうちにデイアドラーさんを救わないと。ニ尔斯君とニニアンちゃんを起こさないように静かに起きてから部

屋から立ち去つた。

親友の事だから幽閉でもしていると思うから牢獄に向かわない
と・・・それと先程のやつと関係があるのか、頭も痛い。必死に頭
を抑えて牢獄に向かい始めた、今この瞬間に動かないと後悔する気が
してならない。

生憎なことに俺の勘は悪い方にはよく当たるのだ。俺は頭の痛み
とこれからくるだろう不安を抱えながら前に進み始めるのだつた。

とにかくデイアドラさんをあの人元に・・・

俺は物凄い頭痛を抱えながら牢獄に到着した、あまりにの酷さでバレてしまうのではないかと焦りもしながらも辿り着くことができた。そこにはやはりデイアドラさんが投獄されていたけど、ここで少しばかり予想外があつた。

ノエルちゃんまでここに投獄されていた、何でと思ったけど今はそんなことを考えている暇はない。頭痛も良くならないのでとりあえずデイアドラさんとノエルちゃんを牢獄から出して二人に静かについてきてと言つて歩き出した。

外に置いてある車に乗つて敵陣営まで連れていけば問題はない。流石にデイアドラさんを殺そうとはしないだろう、それに上手く行けばデイアドラさんを知つている人がいるかも知れないから。

そう考へながら車まで誰にもバレずに到着した、夜なこともあります。それに警備の隙をついて車を発進させた。頭の痛みに耐えながら車を運転しているとデイアドラさんから話しかけてきた。

「すみません、私のためにここまでしてくれましてありがとうございます。それとようやく大切な人の事を思い出せました。本当にありがとうございます」

そうですかそれは良かった、頭痛はするけどそれは素直に嬉しかった。ならばその人にお願いすれば大丈夫という事だ、俺はその人の名前はと尋ねてみるとデイアドラさんはすぐに返答した。

「はい、シグルド様と言う人です。とても優しいお方なのですぐに分かること思います、特徴だと青い髪をしているので分かりやすいと思います」

すみません、ディアドラさん……この世界の基準かもしれないですけど青髪の人物が多すぎて分かりません。しかも青髪をしている人に限つてか性格が良さそうな人が多すぎます。

だから申し訳無いですけど教えて下さい、それ以上の事をと言いたかつたけど言うほど元気は無かつたのでとりあえず青髪の男性に出会つたらお願ひをするのもありだな。

俺もいつまで車の運転が出来るほどの体力が残るか分からなかから誰かに託すことも考えている。まあ、見た目が良さそうな人にしか預けないけど、そう考えながら車を走らせていた。

今のところはなんとか運転できるかもしれないけどこの調子だと帰りが危ないかもしない、本当に最悪の事も考えておかないとけない。ノエルちゃんに運転を任せるという事に。

そう思うと出来る限りにディアドラさんが言っているシグルドと言う人物を見つけないといけない。俺は頭の痛みに耐えながら親友が持つている勢力から抜け出した、この先に行けば誰かと思つて移動していた。

でも流石にいきなり攻撃してくる相手には会いたくないなと思いながら進めていた。するとディアドラさんが急に俺に対して止めてくださいと今まで感じた事もないぐらいに声で言つてきたので驚いてブレーキをかけて車を止めた。

急にどうしたのですか、こちらは頭の頭痛も良くならないから必死に急いでいるのにと思っていた時にディアドラさんが静かに言つたのだ。

「・・・・シ、シグルド様!」

……まじで本当にディアドラさんの探していた人が見つかったの、こんな奇跡があるのかと思つたけどこれも主人公補正とヒロイン補正と呼べるものかもしない。

でも早く見つかってこちらも良かつた、これならばぎりぎり帰りまで持つかもしれない。ひとまず俺もノエルちゃんもディアドラさんと一緒に車から降りてその人に近づいてみた。

すると向こうも気がついたのか、ディアドラ、ディアドラなのかと言つて叫んで走ってきた。するとディアドラさんは泣きそうになりながらシグルド様と言つて走つてお互に抱きついた。

二人には本当に嬉しそうにしながら泣いていた、感動の再会場面だからこんなに頭が痛くなかったらずつと見ていたかつたけど俺の体がそれを許そうとはしなかつた。

このまま見ていると帰り道がいろんな意味で危なくなるので俺はノエルちゃんに車に乗るよと言つた。ノエルちゃんはもう少し見ておきたいと言つてきたけど俺の調子が良くないと謝つた。

俺の様子を見たノエルちゃんは慌てながら申し訳ありませんと謝つてきたけどそこまでしなくも良いからと伝えた。とりあえず調子が悪いから急いで帰りたいので車に乗つて発進させた。

後ろからはディアドラさんとシグルドさんの呼び止められる声が聞こえてきたけど振り返る事はせずに車で親友がいる場所に戻り始めた。

色々とあつたけどディアドラさんが幸せそうで良かつた、初恋はもれなく散つたけど・・・まあ、仕方がない結婚していたのだ。こちらが頑張つても意味がない・・・これで良かつたと思う。

とにかく今は俺の体力が持つ間に親友の城に戻らないと不味いなと考えながら車で走り続けていた。ノエルちゃんが一人とも良かつたですよねと話してきたのでそعدなど返事をした。

その後、特に大きな出来事はなく無事に城まで辿り着くことができたあるけど俺の体はもう限界寸前で気が抜けると意識が無くなりそうでなんとか必死になりながら歩いていた。

ノエルちゃんにはここまで大丈夫と伝えた、するとノエルちゃんは本当に大丈夫なのですかと心配そうに聞いてきた。大丈夫ではないけど大丈夫と答えた。

それでも完全に大丈夫じゃないとあの表情だとバレているけど上手く隠すことも出来ないから・・・と考えているとまたあの嫌な感じがしてきた。

殺せと殺し尽くせと頭の中に直接言われているように聞こえてきた。うるさいと思つても何度も言われてるような感覚で頭がおかしくなりそうだ。

ノエルちゃんに本当に大丈夫だから離れて欲しいと今度は強めで伝えると驚いたのか少し後ろに下がった。それで後ろに下がつてこれで良かつたと思つていた時にまた来てしまつた。あの衝動が・・・踏ん張れ何も見るな、何も考へるな、ただ精神を統一しろ、俺。

そんな必死なことをまるで嘲笑うかのように衝動が大きくなりそうしてとうとう俺は大きな衝動の波に飲まれて意識を手放してし

また。

遠くから見ていたノエルは余りにも異常な事が起きている雅也を心配そうに見て、こちらを見て不気味な笑みを浮かべてきたと思つた次の瞬間、ものすごい速さでノエルに接近してノエルはその速さに対応できずに攻撃されると考えていた。

だがそこに突如現れたのは豊喜であり親友がどこにも居ないと探していたら遠くから異様な気配を察知して駆けつけてきたのであった。

「ノエル、お前には後で色々と聞きたいことがある。その為にもこの場から離れよ、まさかと思うけどこれ以上言うことを聞かないと言わないでくれよ」

ノエルの事を心配にしながらも怒りをこもつた声を出してノエルは震えながらいと言つてその場から離れ始めた。

「さて、雅っち。聞こえてるか分からにいけど、どうするつもりだ。このまま大喧嘩をするのか、それとも止めるのか、お前の答えを教えてほしいところなのだけど」

自分は無駄な氣がするけど一応、聞いてみたが返答は相手の行動で理解した。持っていた武器で自分の急所を狙つてきた。

なるほどならば少しぐらいの怪我は文句を言うなよと思いながら攻撃を受け止めて反撃した。流石に勢いあり過ぎて凄い吹き飛ばされてたので心配になり近づいてみると何事もなかつたように反撃してきた。

おいおい、何か分からぬけど強くなつてゐるじゃないか。本気になれば問題はないかもしねりだけどそつなると親友の身が危なくなる。

と思うけどこのまま暴れさせた方が危険か・・・仕方がない、本当は竜の姿で戦いたくないけど。なんとか距離を取つてから変身しようとしたが向こうはそれを察知したのか距離を開かせないように突っ込んでくる。

やばいなあんな状態になつても頭が回るのか・・・一旦撤退するか・・・いや、ここで逃したらいつ見つかるか分からない。でも一人で止めるには洗脳はかつてやつてみた事があるが失敗に終わつている。

そもそもあれはなんだ凶竜化と近いものを感じるが違う・・・あれは凶竜化と同じ・・・それ以上のものかも知れない。だけど今は親友を救うことだ。本当に昔から世話を掛けさせてくるよ。

まあ、それはこちらも同じかもしねりけどな、雅つち。